千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

東山久保遺跡c地点
村上第1塚群
新東原遺跡i地点
川崎山遺跡o地点
作山遺跡d地点
麦丸宮前上遺跡
作山遺跡f地点
阿蘇中学校東側遺跡b地点
桑納前畑遺跡b地点

平成21年度

八千代市教育委員会

凡　　例

1．本書は、八千代市教育委員会が平成20年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。報告書作成作業は、平成21年度年度事業として行った。

2．　本書に収録した発掘調査は、以下のとおりである。

№.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	東山久保遺跡ｃ地点	島田台字東山久保 989－1の一部	平成20年５月１日～ 平成20年５月22日	134㎡／1,431.15㎡	宅地造成	宮澤久史
2	村上第１塚群	村上字白筋 2656－1　2657－1	平成20年５月20日～ 平成20年５月30日	222㎡／2,338㎡	宅地造成	宮澤久史
3	新東原遺跡ｉ地点	勝田字新東原 1278　ほか	平成20年６月４日～ 平成20年７月３日	1,312㎡／15,893㎡	宅地造成	宮澤久史
4	川崎山遺跡ｏ地点	萱田字中台 2264番１	平成20年７月16日～ 平成20年７月31日	264㎡／3,569㎡	土砂採取	宮澤久史
5	作山遺跡ｄ地点	小池字作山 415ほか	平成20年８月１日～ 平成20年12月１日	2,256㎡／25,800㎡	森林伐採抜根造成	宮澤久史
6	麦丸宮前上遺跡	麦丸字宮前上 1393－4　ほか	平成20年９月４日～ 平成20年９月19日	686㎡／7,123.96㎡	宅地造成	森　竜哉
7	作山遺跡ｆ地点	小池字作山 408ほか	平成20年12月16日～ 平成21年１月７日	232㎡／2,280㎡	駐車場建設	宮澤久史
8	阿蘇中学校東側遺跡 ｂ地点	米本字山谷 2750－2　ほか	平成20年12月17日～ 平成21年１月７日	128㎡／1,669㎡	店舗建設	宮澤久史
9	桑納前畑遺跡ｂ地点	桑納字丸畑 97番地３ほか	平成21年１月30日～ 平成21年２月16日	140㎡／1,116.84㎡	福祉施設建設	宮澤久史

3．報告書作成作業は、平成21年度事業として平成21年４月２日～22年２月26日にかけて行なった。

4．本書の執筆・編集は、宮澤久史が行なった。遺物の写真撮影は高屋麻里子、図版作成の補助は小弓場直子が行った。

5．出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。

6．本書に使用した地形図は、八千代市発行の10,000分の１都市計画図及び2,500分の１八千代都市計画基本図を使用した。

7．各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。

弥生土器・土師器・・・１/４　　その他、拓影図・断面図・・・１/２

8．発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会　八千代市立郷土博物館　道上文　峰村篤　高花宏之　内田武志　村田一男

目　　次

凡　例
目　次
挿図目次
図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　各調査の概要……4
　1　東山久保遺跡ｃ地点……4
　2　村上第１塚群……6
　3　新東原遺跡ｉ地点……8
　4　川崎山遺跡ｏ地点……10
　5　作山遺跡ｄ地点……12
　6　麦丸宮前上遺跡……18
　7　作山遺跡ｆ地点……20
　8　阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点……22
　9　桑納前畑遺跡ｂ地点……24
　写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　平成20年度市内遺跡位置図……2
第２図　東山久保遺跡位置図……4
第３図　東山久保遺跡ｃ地点トレンチ配置図…5
第４図　村上第１塚群位置図……6
第５図　村上第１塚群遺構配置図……7
第６図　新東原遺跡ｉ地点位置図……8
第７図　新東原遺跡ｉ地点遺構配置図等……9
第８図　川崎山遺跡ｏ地点位置図……10
第９図　川崎山遺跡ｏ地点遺構配置図等……11
第10図　作山遺跡ｄ地点位置図……12
第11図　作山遺跡ｄ地点遺構配置図等……13
第12図　作山遺跡ｄ地点出土遺物……15
第13図　作山遺跡ｄ地点出土遺物（２）……17
第14図　麦丸宮前上遺跡位置図……18
第15図　麦丸宮前上遺跡遺構配置図等……19
第16図　作山遺跡ｆ地点位置図……20
第17図　作山遺跡ｆ地点遺構配置図等……21
第18図　阿蘇中学校東側遺跡位置図……22
第19図　阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点トレンチ配置図等……23
第20図　桑納前畑遺跡位置図……24
第21図　桑納前畑遺跡ｂ地点遺構配置図等……25
第22図　桑納前畑遺跡ｂ地点出土遺物……27
第23図　桑納前畑遺跡ｂ地点出土遺物２……28

図版目次

図版１　村上第１塚群
図版２　新東原遺跡ｉ地点・川崎山遺跡ｏ地点
図版３　作山遺跡ｄ地点
図版４　作山遺跡ｄ地点
図版５　麦丸宮前上遺跡・桑納前畑遺跡ｂ地点
図版６　桑納前畑遺跡ｂ地点

Ⅰ　調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進み、平成８年４月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにその傾向を強め、沿線を中心とした新しい街づくりが進んでいる。こうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」）では、千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者から事前手続きとして提出される「埋蔵文化財の取り扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。確認調査が必要と判断される事業については、国庫及び県費の補助を受け、「市内遺跡発掘調査事業」として調査を実施している。

以下は、平成20年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

東山久保遺跡ｃ地点

平成20年１月、染谷不動産株式会社代表取締役染谷しのぶ氏（以下「事業者」）から島田台字東山久保の宅地分譲に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、現況アスファルト舗装の駐車場で地表面の遺物散布状況の不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、隣接地点の調査において遺構が検出されていた。このことから、市教委は、「周知の埋蔵文化財包蔵地内であることから文化財保護法（以下「法」）第93条の届出が必要」であることと「その取り扱いについて協議したい」旨（以下「遺跡が所在する旨」）を同年２月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年２月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年５月１日に調査を開始した。

村上第１塚群

平成20年４月、株式会社イケダ測量設計代表取締役池田英男氏（以下「事業者」）から村上字白筋の宅地造成に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、現況、荒蕪地であったが遺物も散布していた。このことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年５月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年５月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年５月20日に調査を開始した。

新東原遺跡ｉ地点

平成20年３月、有限会社開成代表取締役浅香年史氏（以下「事業者」）から勝田字新東原の宅地造成に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、現況畑であり、遺物も散布していた。また、隣接地点の調査において遺構が検出されていたことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年４月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年５月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年６月４日に調査を開始した。

東山久保遺跡調査前現況

東山久保遺跡調査風景

図１　平成20年度調査　市内遺跡位置図

（八千代都市計画基本図に加筆）

川崎山遺跡ｏ地点

平成20年６月、株式会社細田工務店代表取締役今村民夫氏（以下「事業者」）から萱田字中台の造成に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、現況、荒蕪地で地表面の遺物散布状況の不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、隣接地点の調査において遺構が検出されていた。このことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年７月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年７月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年７月16日に調査を開始した。

作山遺跡ｄ地点

平成20年５月、豊田秀樹氏（以下「事業者」）から小池字作山の森林伐採造成に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、現況、山林及び畑で遺物も散布していた。隣接地点の調査において遺構が検出されていたことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年６月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年７月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年８月１日に調査を開始した。

麦丸宮前上遺跡

平成20年８月、日新ホーム株式会社代表取締役岡田定一氏（以下「事業者」）から麦丸字宮前上の宅地造成に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、現況、畑で遺物も散布していた。市教委は、遺跡が所在する旨を同年８月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年８月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年９月４日に調査を開始した。

作山遺跡ｆ地点

平成20年11月、浅野さとみ氏（以下「事業者」）から小池字作山の駐車場建設に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、現況、山林で地表面の遺物散布状況の不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、隣接地点の調査において遺構が検出されていた。このことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年12月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年12月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年12月16日に調査を開始した。

阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点

平成20年11月、株式会社平和建設代表取締役兪弓納持和男氏（以下「事業者」）から米本字山谷の店舗建設に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、現況、山林で地表面の遺物散布状況の不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、隣接地点の調査において遺構が検出されていた。このことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年12月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年12月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年12月17日に調査を開始した。

桑納前畑遺跡ｂ地点

平成21年１月、社会福祉法人八千代翼友福祉会理事長篠原文男氏（以下「事業者」）から桑納字丸畑の福祉施設建設に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、現況、畑で遺物も散布していた。また、隣接地点の調査において遺構が検出されていたことから、市教委は、遺跡が所在する旨を同年１月に回答した。この回答を受け事業者との間で、取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになり、同年１月に法第93条の届出が提出され、準備の整った同年１月30日に調査を開始した。

Ⅱ　各調査の概要

１．東山久保遺跡ｃ地点

図２　東山久保遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

東山久保遺跡は、新川と神崎川が合流する市域北部の台地、島田台地区に所在する。地形、立地に対する詳細は、既に大学建設を含む大規模開発等により地形の改変が進み本来の地形を推定するのは困難な状況であが、北に神崎川を臨む台地に対して南へと発達した谷津の奥部に形成された舌状台地に展開していたと考えられ、標高は約20m、旧水田との比高差は約14mである。

周辺の遺跡として、西側に松原遺跡、東側に真木野向山遺跡などが隣接し、遺跡が濃密に展開している地区である。本遺跡の過去の調査として、これまで２地点が発掘調査されている。大学建設を含む大規模開発に伴う調査で行われたａ地点、宅地造成に伴う調査として行われたｂ地点である。ａ地点は、整理作業が未実施のため詳細は明らかになっていないが、縄文時代中期の竪穴住居跡７軒、弥生時代後期６軒、弥生時代後期～古墳時代前期５軒、古墳時代後期13軒が検出されている。ｂ地点では、古墳時代後期の竪穴住居跡２軒、土坑１基が検出されている。今回のｃ地点は、ｂ地点の南側隣接地にあたる。

調査の方法と経過

現況がアスファルト舗装の駐車場で一部使用もされていたため、調査区西側を前半調査、東側を後半調査として、駐車場使用場所の変更を行ないながら調査を進めた。全体的には調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

調査期間は平成20年５月１日～５月22日で、５月１日に機材搬入、現況写真撮影などの調査準備、５

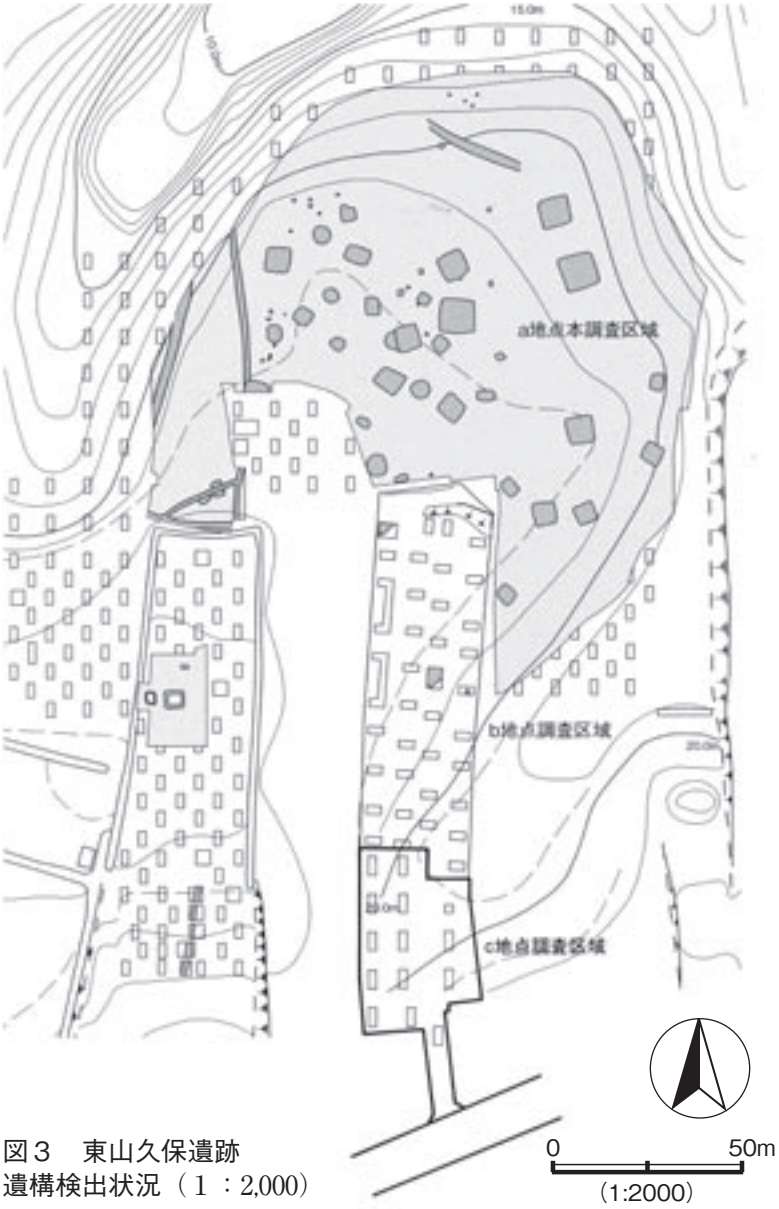


図３　東山久保遺跡
遺構検出状況（１：2,000）

調査風景

トレンチ完掘状況

トレンチ完掘状況

月７日、前半部のトレンチ設定、仮設トイレ搬入、８日、重機による前半部アスファルト撤去作業、９日、重機による表土除去作業、遺構確認及び埋め戻し作業を行う。以後、写真撮影等の記録作業も適宜行なう。12日、前半部の第２回トレンチ設定を行なう。13日、14日は雨天の為、野外調査中止。15日、重機による表土除去作業、遺構確認及び埋め戻し作業を行う。16日、後半部のトレンチ設定、19日、重機による後半部アスファルト撤去作業を行う。20日は、雨天の為、野外調査中止。21日、重機による表土除去作業、遺構確認及び埋め戻し作業を行い、調査を終了した。

調査の概要

全トレンチにおいて２ｍ以上掘削を試みたが、地山を検出することはできず、遺構、遺物を検出することはできなかった。また、安全上の配慮からセクション調査も実施しなかった。

調査のまとめ

掘削トレンチの断面観察からは、何れも現代のゴミと共に埋め戻した土が堆積していた。これが、本来の谷津を埋めた土なのか、土取りした後に埋め戻した土なのかは判然としなかったが、ａ地点、ｂ地点の遺構配置状況などから合わせて考えると、いずれにしても、ｃ地点は東山久保遺跡の限界地点を示すことになり、遺跡は、ａ地点とｂ地点の一部を中心として展開していることが明らかになった。東山久保遺跡は、谷津の奥部に形成された舌状台地に展開する縄文中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とした複合遺跡と言える。

２．村上第１塚群

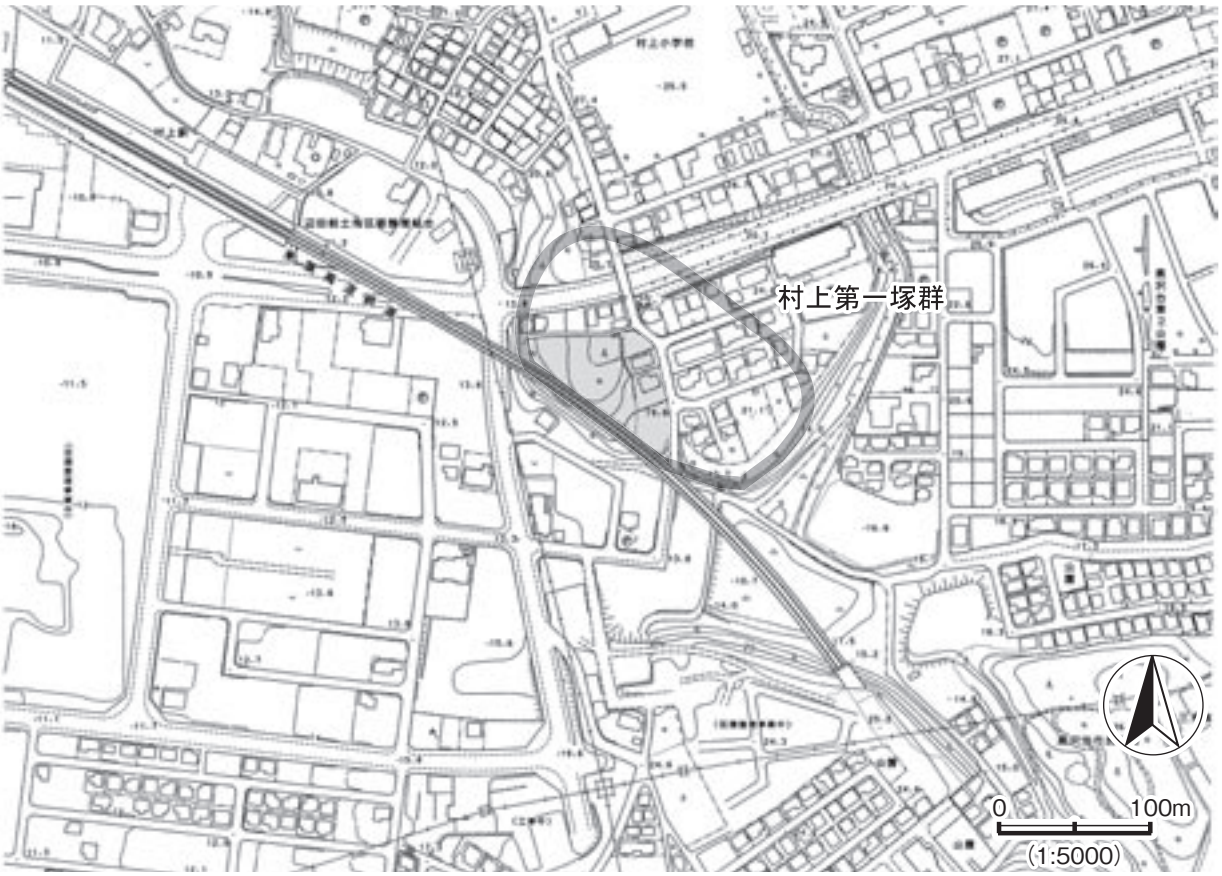


図４　村上第１塚群位置図（１：5000）

遺跡の立地と概要

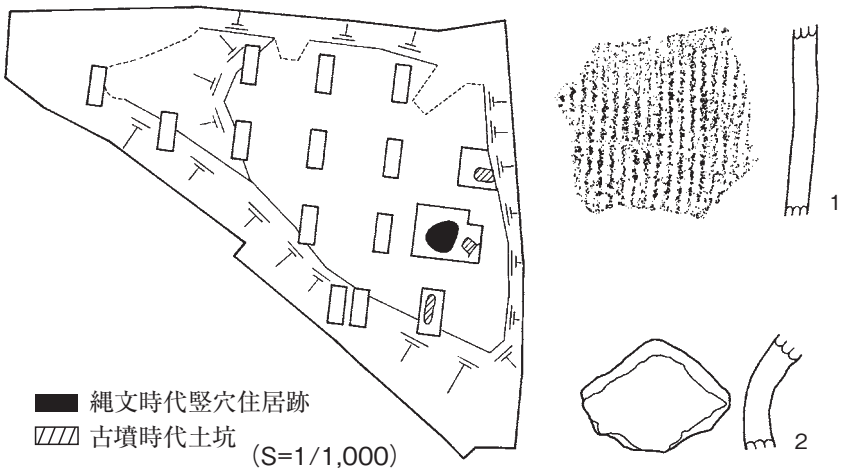
村上第１塚群は、市域中央部に位置する村上地区に所在し、市域中央を流れる新川東岸の台地先端部から平坦部に展開する。標高は約28m～16mで、新川から入り江状に発達した辺田前・沖塚前低地との比高は最大約12mである。周辺地形は、宅地造成・都市計画道などで既に改変を受けているが、本来、眼下に辺田前・沖塚前低地を見下ろすことのできる、眺望のよい地点だったと考えられる。今回の調査地点は、台地南側先端部から西へと下る緩斜面にあたる。

本塚群は､広義な意味では村上遺跡群に含まれ､北から村上名主山遺跡､学史上著名な村上込ノ内遺跡、また、近年、報告書が刊行された殿内遺跡、浅間内遺跡、白筋遺跡と連なり、本塚群にいたる。本塚群北西には、八千代市指定史跡の根の上神社古墳（前方後円墳）、東方には村上第２塚群が所在している。また、辺田前・沖塚前低地を越えた南側対岸には沖塚遺跡などが展開していた。

本塚群は、本来15基で構成され、過去の調査としては、既に２回の調査が行われている。１回目の調査は、昭和48年、村上団地造成に伴う調査の中で行なわれ、15基のうち９基が報告されている。２回目の調査は、昭和50年、都市計画道路建設に伴う調査として実施され、残り６基のうち３基が調査された。調査された15基中９基の古墳（塚）は、何れも調査終了後には、消滅している。今回の調査地点は、残存する塚３基が所在する地点となる。

調査の方法と経過

市教委が現地踏査を行なった段階では、樹木は既に伐採と一部伐根が行なわれており、地上遺構としての塚は既に削平され更地となっていた。調査の主眼は、塚に伴うであろう主体部とその他の地下遺構の検出にシフトした。



調査風景

図５　村上第一塚群遺構配置図等

調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２ｍ×５ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、人力・重機を併用した。

調査期間は、平成20年５月20日～５月30日で、５月20日、21日に機材搬入、調査区閉鎖などの調査準備及び遺物の表面採集を行なう。22日、現況写真撮影及びグリッド杭打ち、仮設トイレ搬入、23日、トレンチ設定、人力による包含層調査を開始する。並行して写真撮影等の記録作業を適宜行う。26日から重機による表土除去作業及び遺構確認作業を開始する。掘削深度が深いトレンチが多いため、調査終了したトレンチから適宜埋め戻しを行なう。重機の稼動は28日まで継続する。29日は雨天の為、野外調査中止。30日、遺構確認作業を終了し、調査を終了した。

調査の概要

調査区東側は、削平が進み既にロームが露出している状況であった。対して西側は、削平した表土を盛土していた為、２ｍ以上の掘削を試みても地山を検出することはできないトレンチが多かった。以上のことからセクション調査は省略した。遺物の包含層も検出し得なかった。しかしながら、このような状況の中で、ロームが露出している調査区東側では、縄文時代早期の竪穴住居跡１軒と古墳時代の土坑３基を検出することが出来た。

遺物は、削平された東側を中心に表採資料で縄文土器、古墳時代土師器を各少量採取した。１は、縄文土器、早期撚糸文系土器で住居跡を検出した付近での採集であった。深鉢の胴部片で色調は橙褐色、焼成は良好、ＲＬ縄文を施している。井草Ⅰ～Ⅱと考えられる。２は、ロクロ整形の土師器甕形土器の頸部片で、色調は暗褐色、焼成は良好、内外面とも横位のナデ調整、古墳時代後期の所産と考えられる。

調査のまとめ

検出された縄文時代早期の竪穴住居は出土した遺物から、早期撚糸文期、井草Ⅰ～Ⅱ式期の所産で八千代市でも最古級の竪穴住居跡となるだろう。村上第１塚群の諸調査や浅間内遺跡、更には、辺田前・沖塚前低地の最奥部に位置する新林遺跡などで井草期の土器が出土していた為、辺田前・沖塚前低地の北側台地先端部に撚糸文期前半の活動痕跡が予測されていた中、住居跡が検出されたのは、調査開始当初には想定していなかった成果を得られたことになる。

検出された３基の土坑については、失われた塚３基の主体部と考えられる。村上第１塚群15基の塚は、これで全て消滅したことになる。幸い、検出した３基の主体部である土坑は、縄文早期の住居跡と共にその後本調査をする機会を得た。近々、整理、報告書刊行を行い、今後の周知・啓発に資することを期したい。

３．新東原遺跡ｉ地点

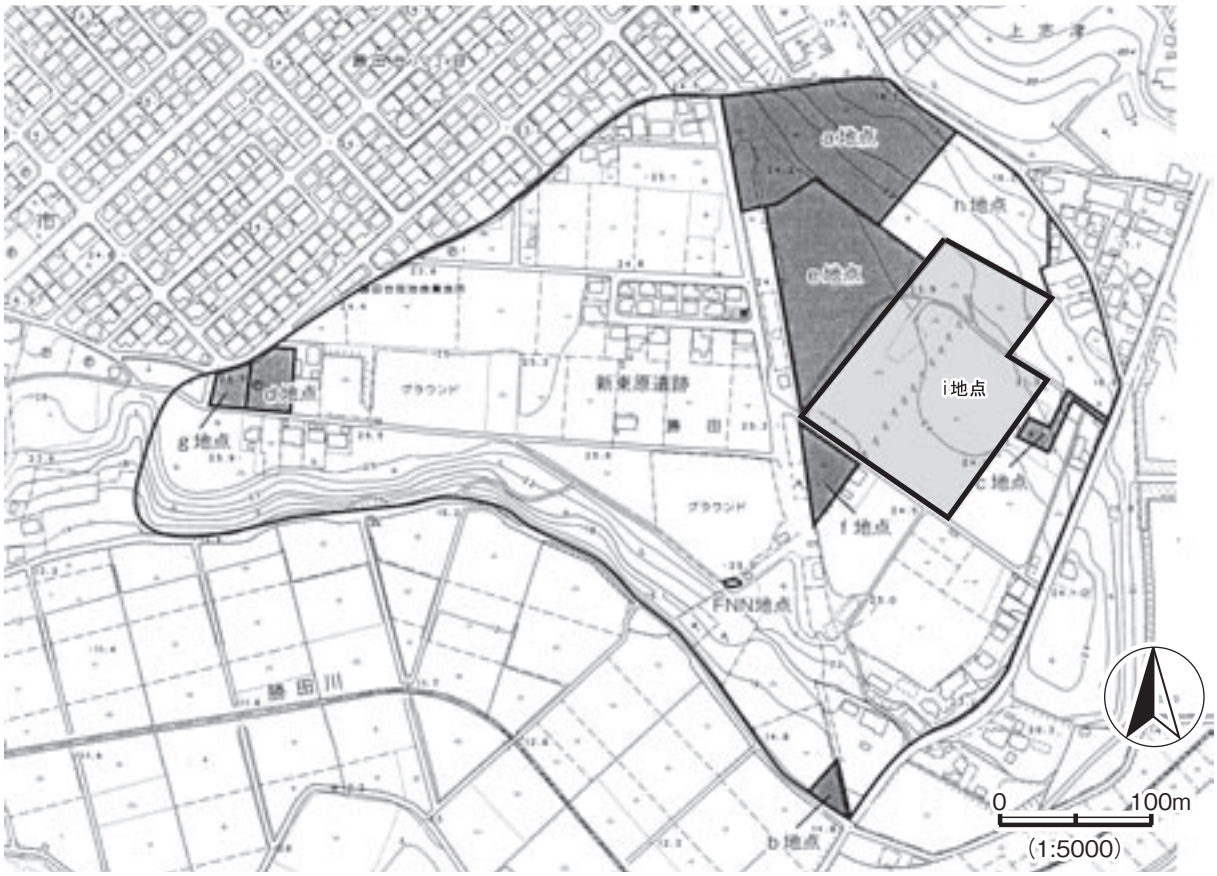


図６　新東原遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

新東原遺跡は、市域南部の勝田地区に所在する。市域南端を流れる勝田川北岸の台地で、勝田川とその支谷に挟まれた台地の先端部から平坦部に展開する。標高は約16m～24mで、水田面との比高は最大約12mである。

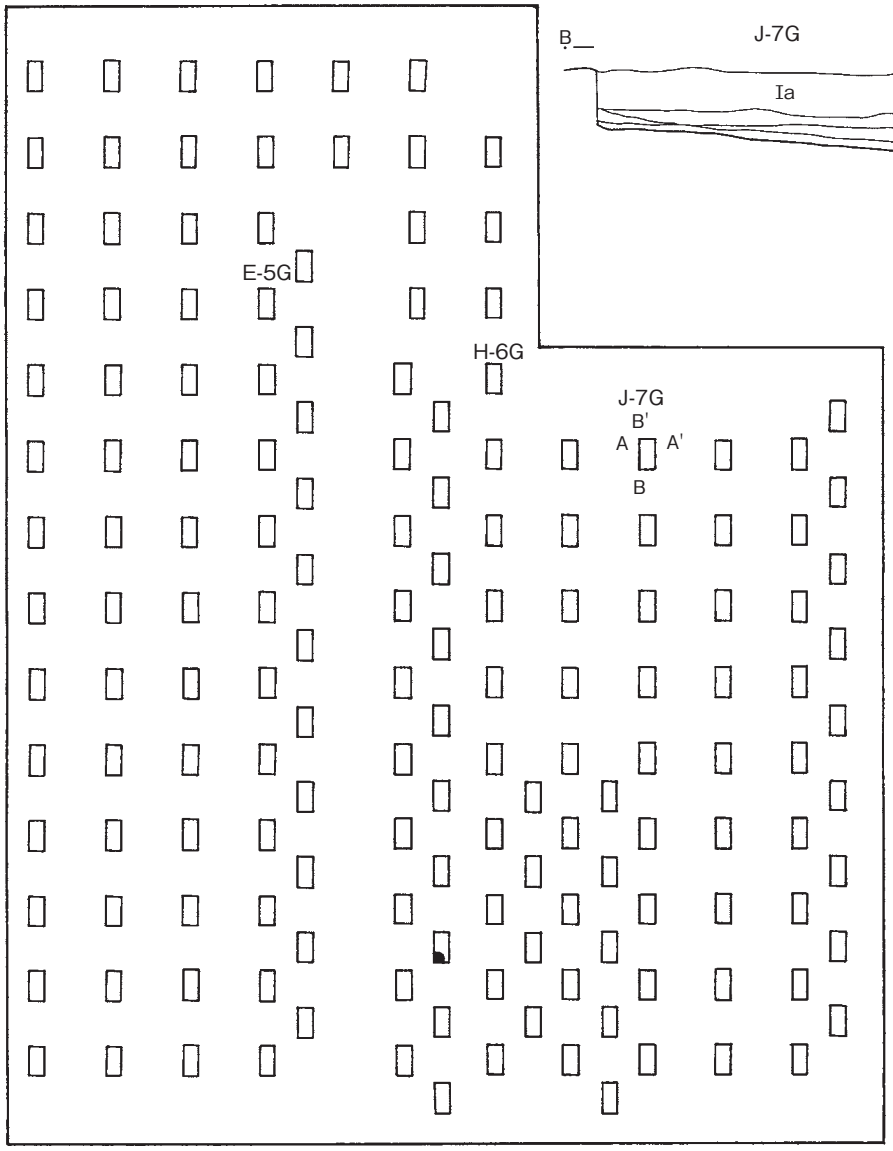
周辺の遺跡として、本遺跡の西方に勝田大作遺跡、勝田前畑遺跡などが連なり、北方には、佐倉市になるが、上志津大堀遺跡などが展開する。

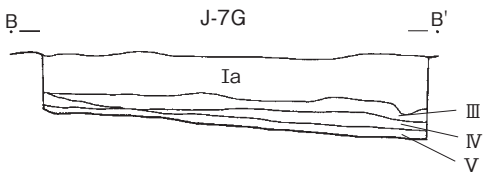
これまでにａ～ｈの８地点で発掘調査が行われている。今回のｉ地点は、ｅ・ｆ・ｈ地点に隣接する地点で標高20m～24mの台地の平坦部から先端部の緩斜面地に位置する。ａ地点では縄文時代後期加曽利Ｂ式土器と土坑群などが検出され、ｂ地点では縄文前期後半の住居跡１軒、後期加曽利Ｂ式土器などが出土している。その他の地点では、縄文後期の土器等が散布、少量する程度で遺構、遺物の密度は薄いと言えるだろう。今回のｉ地点は、ｅ・ｆ・ｈ地点の隣接地にあたる。

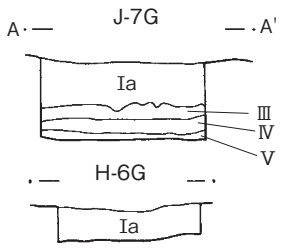
調査の方法と経過

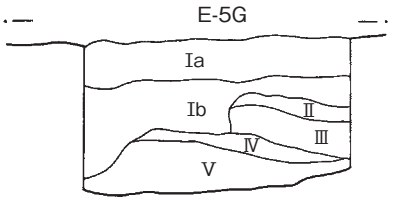
現況は、畑と荒蕪地であった。荒蕪地の下草を刈りつつ並行してトレンチを設定することにした。調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

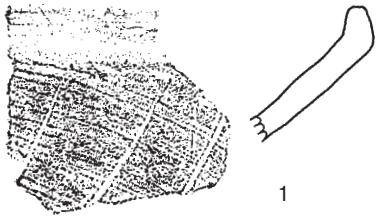
調査期間は、平成20年６月４日～７月３日で、６月４日、５日に機材搬入、調査区閉鎖、現況写真撮影などの調査準備及び遺物の表面採集を行なう。５日から下草刈り、グリッド杭打ちトレンチ設定を開始する。６日、人力による包含層調査を開始、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。13日、下草刈り、グリッド杭打ちトレンチ設定が終了する。16日から重機による表土除去作業及び遺構











調査風景

(S=1/1,000)

図７　新東原遺跡ｉ地点遺構配置図等（１：5,000）

確認作業を開始する。26日、雨天の為、野外調査中止、27日、調査終了地区から埋め戻しを開始する。30日、遺構確認作業を終了する。７月１日、機材撤収。３日、埋め戻しを含め調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、黒色土、Ⅲ層、暗褐色土、Ⅳ層、黒黄褐色土、Ⅴ層、ソフトロームで遺構確認はⅤ層上面で行なった。台地平坦面に位置する南側は、表土層下が直接ソフトローム層で、先端部に位置する北側に行くにつれ、Ⅱ層以降が検出され、ロームの検出深度も深くなった。

遺構は、縄文時代の陥穴１基と同じく縄文時代の土坑１基を検出した。

遺物の包含層は検出されなっかた。出土遺物は縄文土器が少量出土。また、ｅ、ｆ、ｈ地点で出土した砲弾の弾子が４点出土している。１は縄文土器で、浅鉢口縁片。色調は橙褐色、焼成は良好。横走する浅い条痕を施した後、斜位の沈線を施す。内面はミガキ。加曽利Ｂ３式～曽谷式と考えられる。

調査のまとめ

検出された土坑は、遺構の形態、覆土の観察から縄文時代の所産と判断した。本遺跡は、これまでの調査で遺構遺物の分布が薄いことが明らかになりつつあるが、今回の調査地点は、台地の平坦部を多く占めるためか、そうした中でも、検出遺構、出土遺物が少なかった。また、縄文時代の遺構で、陥穴が検出されたのは本遺跡で初例であり、今回の調査の成果の１つである。

４．川崎山遺跡ｏ地点

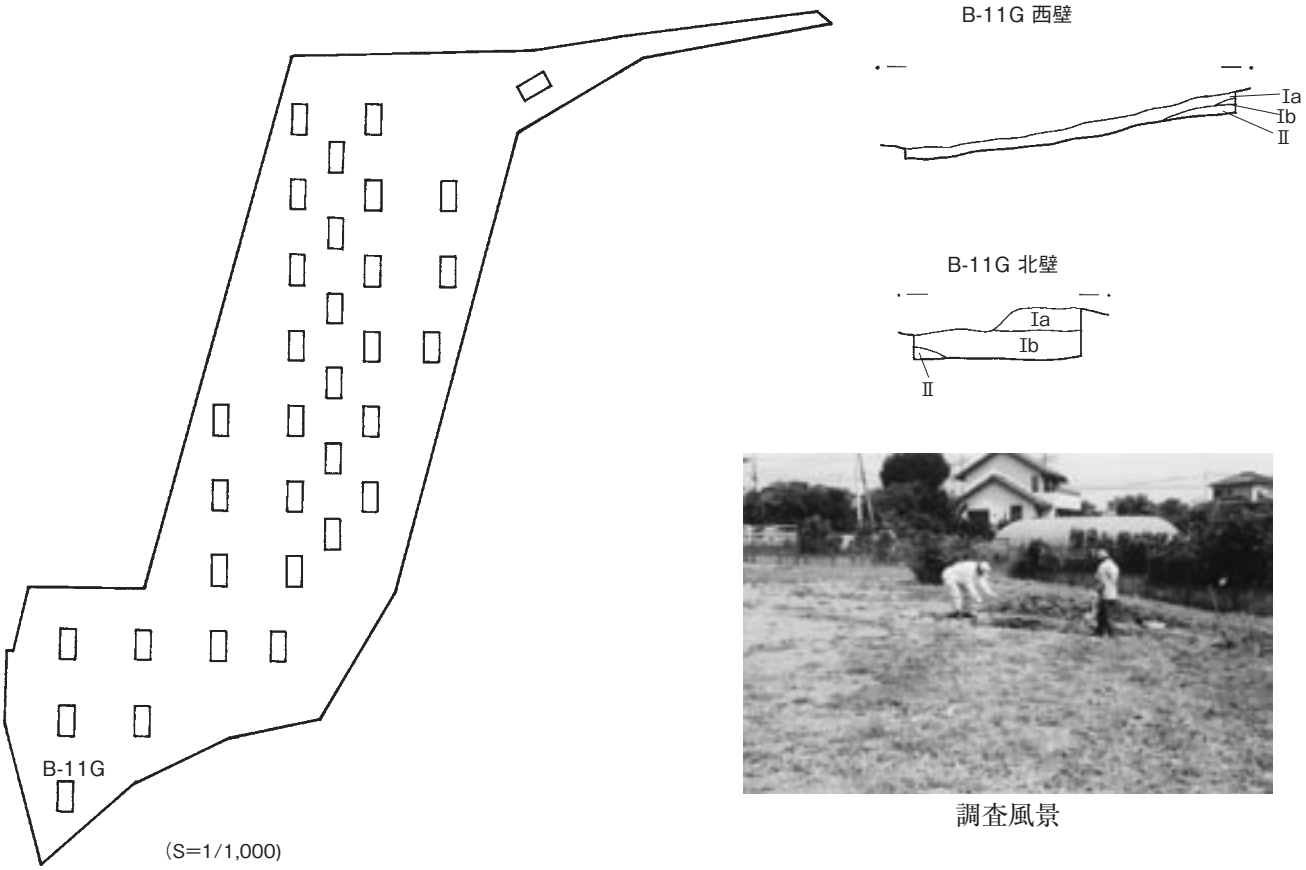
図８　川崎山遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、市域中央部に位置する萱田地区に所在し、市域中央を流れる新川西岸に位置する。北と南を新川の低地から入る谷津に区切られている台地一帯に展開する。標高は約20m～26mで、低地との比高は約７ｍである。

本遺跡は広義の意味では、萱田遺跡群に含まれ、北側の谷津を越えた対岸に池ノ台遺跡、さらに北方に白幡前遺跡、井戸向遺跡、坊山遺跡、北海道遺跡、権現後遺跡などの弥生時代～古代を中心とした集落遺跡が連なる。また、南側の谷津を越えた対岸は弥生時代を中心とした上ノ山遺跡がある。

市内でも最も調査件数の多い遺跡で、これまでａ～ｎの14ヶ所が調査され、台地の東側は、全貌がほぼ明らかになっている。台地東半は、古墳時代中期を中心に旧石器～奈良・平安時代の遺物、集落跡が主体になり、台地中央部は、縄文時代の陥穴、近世以降の溝が検出されている。台地西側の奥部、舌状台地の基部にあたるｍ地点では、縄文中期阿玉台式期の集落が検出され、台地東側とは違う所見が得られている。今回のｏ地点は、ｍ地点の東側隣接地に位置し、台地先端部から平坦部にあたる。



調査風景

図９　川崎山遺跡ｏ地点トレンチ位置図等

調査の方法と経過

現況は、荒蕪地であった。事業者の協力により、荒蕪地の下草刈が終了した段階で、調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

調査期間は、平成20年７月16日～７月31日で、７月16日に機材搬入、現況写真撮影などの調査準備及びグリッド杭打ちを行なう。17日からトレンチ設定及び人力による包含層調査を開始する。写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。23日、包含層を終了し、重機による表土除去作業及び遺構確認作業を開始する。24日、表土除去作業、遺構確認作業を終了。完掘全景写真を撮影する。25日～29日にセクション調査及び機材撤収などの残務を行い、30日、埋め戻しを含め調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、ソフトロームで遺構確認は、Ⅱ層上面で行なった。

撹乱が多かったこともあるが、遺構は、検出されなかった。

遺物の包含層は検出されなっかた。出土遺物は、縄文土器(阿玉台式)が少量出土。何れも小片である。

調査のまとめ

今回の調査の目的の１つに、ｍ地点で検出された阿玉台式の集落の展開を知ることがあった。全体に撹乱が多かった為、判然としない部分もあるが、遺構が検出されなかったことから、逆に阿玉台式の集落の限界を捉えることができた。ｍ地点で検出された阿玉台式期の集落は、ｍ地点の中で完結していた小規模な集落であることが、明らかになったと考えられる。

５．作山遺跡ｄ地点

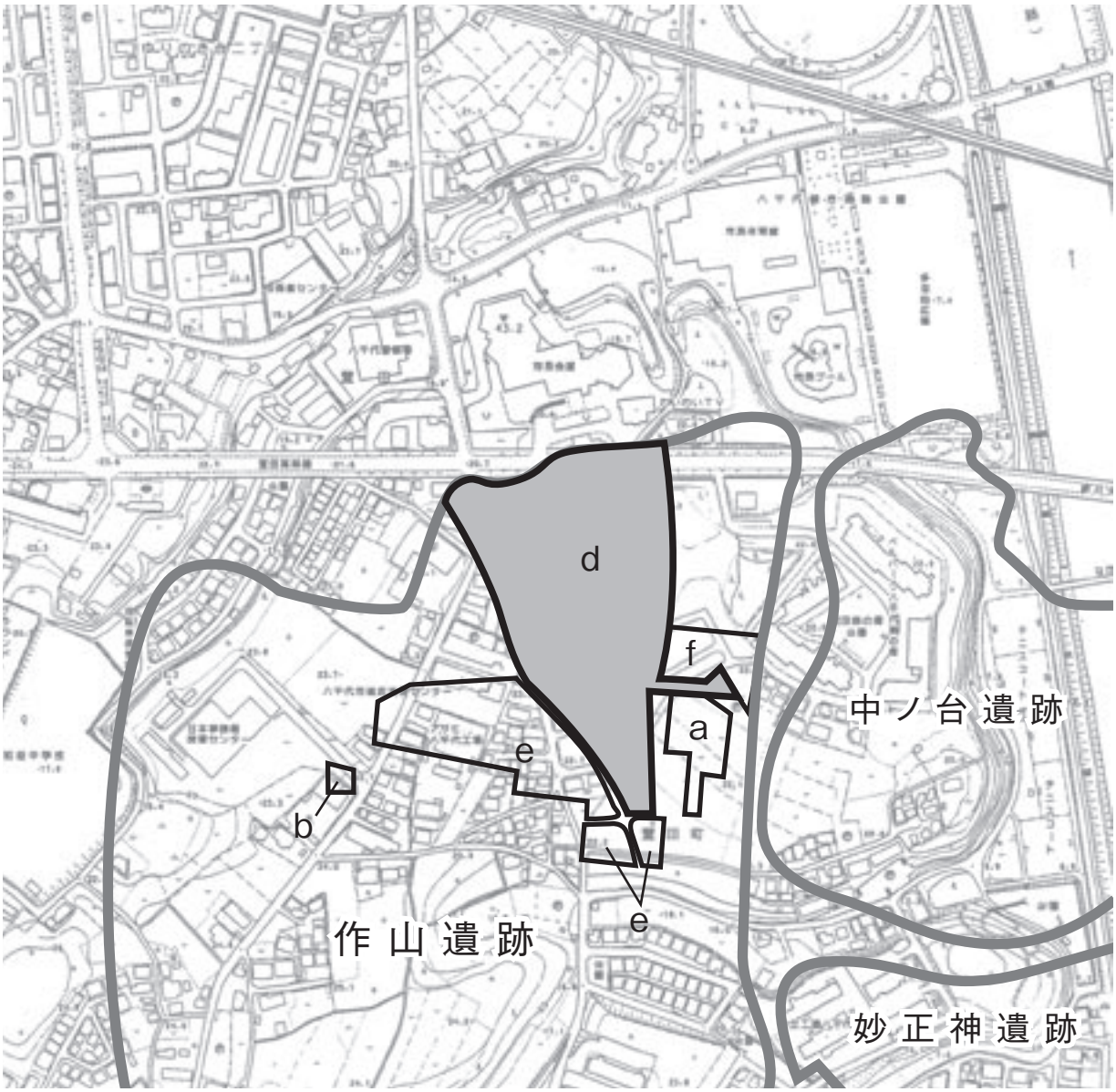


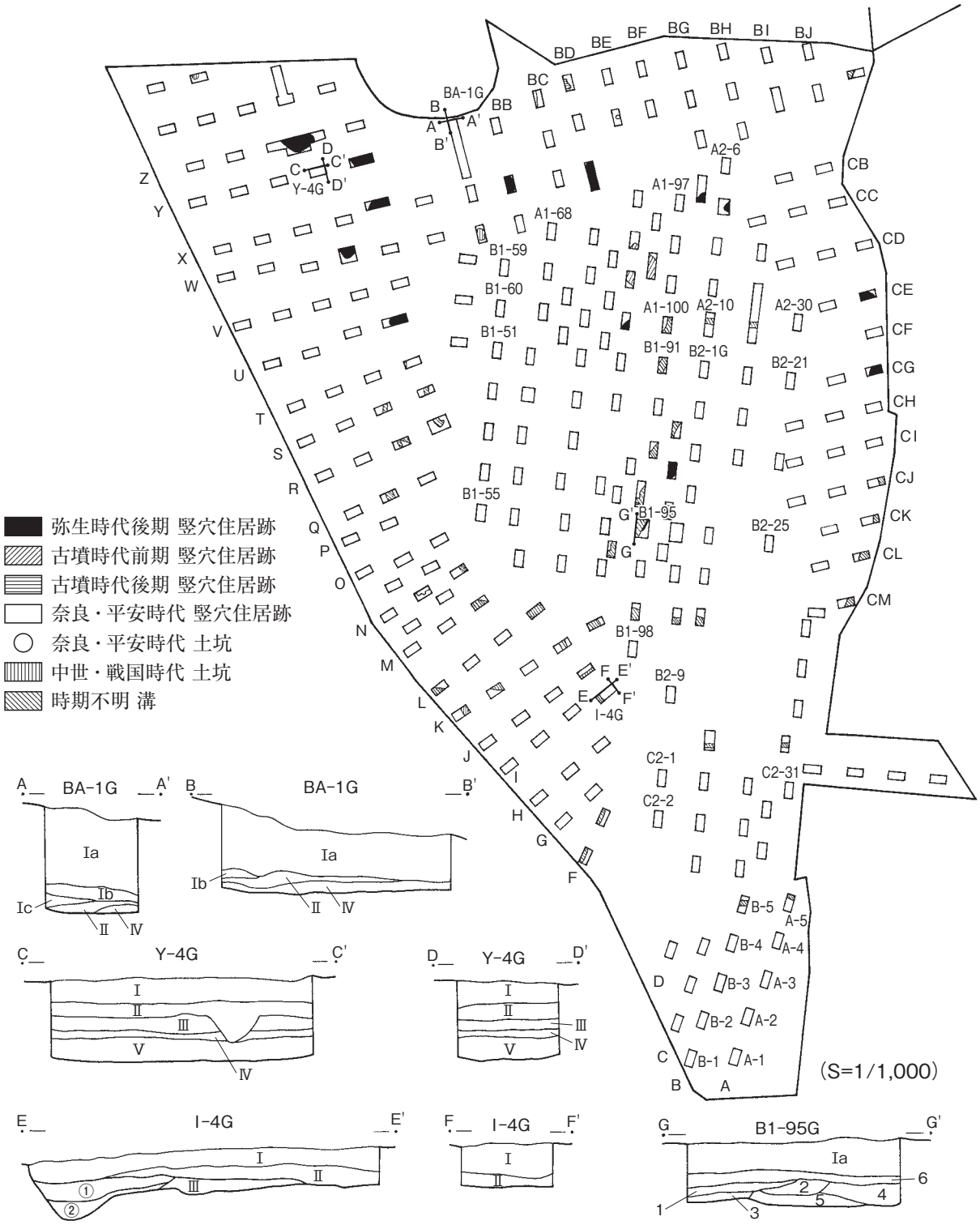
図10　作山遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

作山遺跡は、市域北部の小池地区に所在する。市域北端を流れる神崎川南岸の台地に位置し、神崎川とその支流の鈴身川に挟まれた台地先端部～平坦部に展開する。標高約20m～22mで、低地との比高は約13mである。

周辺の遺跡としては、本遺跡東方に中ノ台遺跡、妙正神遺跡、南方に神久保寺台遺跡、西方に原内遺跡等が隣接しながら展開する。また、本遺跡を含むこれら遺跡群の中に、作山塚群、神久保塚等が点在している。

これまでにａ～ｃの３地点で発掘調査が行われている。a地点では、中世火葬墓･土坑墓等が検出され、遺物も中世白磁・青磁・中世銭貨などが出土した。ｂ地点では、遺構・遺物とも出土しなかった。ｃ地点においては、時期不明の溝、奈良・平安時代の土師器・須恵器が少量出土している。ａ地点で中世の遺構・遺物が検出されている他、遺跡の全貌は把握されていないのが現状である。今回のｄ地点は、ａ地点の西側及び北側に隣接する地区である。



① 暗褐色土層
② 暗褐色土層

Ⅰa層 表土 褐色土
Ⅰb層 表土 暗褐色土
Ⅰc層 表土 褐色土
Ⅱ 層 黒褐色土層
Ⅲ 層 暗褐色土層
Ⅳ 層 ソフトローム漸移層
Ⅴ 層 ソフトローム層

1 暗褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 黒褐色土層
5 暗黄褐色土層
6 暗褐色土層

図11 作山遺跡ｄ地点遺構配置図等

調査の方法と経過

現況は、調査区中央の畑地とその周囲の山林であった。調査開始時点で畑は耕作中であった為、山林部分から調査を着手した。山林部分は、事業者の協力を得ながら、樹木の枝払いを行いつつ並行してトレンチを設定することにした。調査区の形状や、樹木の並びを考慮しながら、概ね10m間隔のラインを設定し任意のトレンチを設定した。個々のトレンチは２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、ラインごとに概ね10m間隔で設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。畑地に関しては、調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。畑地、山林何れも、表土除去については、重機を使用した。

調査期間は、平成20年８月１日～12月１日で、８月１日～５日に機材搬入、調査区閉鎖、現況写真撮影などの調査準備及び山林部分のトレンチ設定を開始する。６日、人力による包含層調査を開始、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。８日から、重機による表土除去作業を調査の進捗に合わせ断続的に実施する。11日から遺構確認作業を開始する。19日～22日、畑地部分の一部を先行調査、25日から山林部分に戻る。９月18日から畑地部分のグリッド杭打ちトレンチ設定を開始する。９月24日から畑地における重機表土除去作業及び遺構確認作業を始める。９月26日～10月８日まで諸般の事情で野外調査中止。10月10日、調査再開。11月20日に遺構確認作業を終了し、11月25日、完掘状況写真を撮影し、26日～12月１日、機材撤収を行い、調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、黒褐色土、Ⅲ層、暗褐色土、Ⅳ層、ソフトローム漸移層、Ⅴ層、ソフトローム層で遺構確認は、Ⅳ層下面、Ⅴ層上面で行なった。基本土層全てが確認できるのは、調査区北側の台地先端部分にあたる地点で、しかも山林部分に限定されていた。畑地部分や山林部分でも調査区南側の台地平坦面にあたる地点での土層は、Ⅰ層、表土下が直接、Ⅴ層、ソフトローム層である状態であった。また、調査区内にい何本もの溝と溝に沿った状態で土塁状の高まりを現状で確認していたが、これらは、現在の地境にほぼ沿った状態で巡っていること、土塁状の高まりのセクション調査により、しまりが非常に弱いことⅠ層、表土層の堆積が殆どであったことから極めて新しい近現代の所産と判断した。

検出遺構については、弥生時代後期の竪穴住居跡14軒、古墳時代前期の住居跡１軒、古墳時代後期の住居跡１軒、奈良・平安時代の住居跡１軒、奈良・平安時代の土坑１基、及び中世～戦国時代の土坑３基を検出した。

遺物の包含層は検出されなっかた。出土遺物は、弥生土器が中心に出土している。その他、縄文土器（中期）、古墳時代土師器、奈良･平安時代土師器、中世～戦国時代陶磁器などが各少量が出土している。[図12（１～17）]　１～３は縄文土器で何れもグリッド一括遺物である。１は、深鉢胴部片。色調は外面、褐色、内面、橙褐色。焼成は普通。Ｌ縄文を施文後、横走する結節文２段を施す。前期末～中期初頭と考えられる。２は、深鉢胴部片。色調は外面、暗褐色、内面、黒褐色。焼成は良好。ＬＲ縄文の後、沈線による区画をする。中期、加曽利ＥⅡと考えられる。３は、深鉢胴部片。色調は暗褐色。焼成は良好。ＬＲ縄文の後、沈線による区画をする。２と同様、中期、加曽利ＥⅡと考えられる。その他、焼礫を畑地部分で表採で得ている。

４～12は弥生土器。４は、甕形土器の頸部～底部で、Ｂ１－95Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の覆土からの出土である。色調は外面、黒褐色、広範囲にススが付着している。内面は暗褐色。焼成は普通。最大径は胴部中央にあり、底部がやや張り出す。頸部は無文であるが、僅かに輪積痕を残す。胴部はＲＬ縄文で胴部上位から下位へと施文し胴部下端まで施す。内面は、丁寧に磨きが施されている。

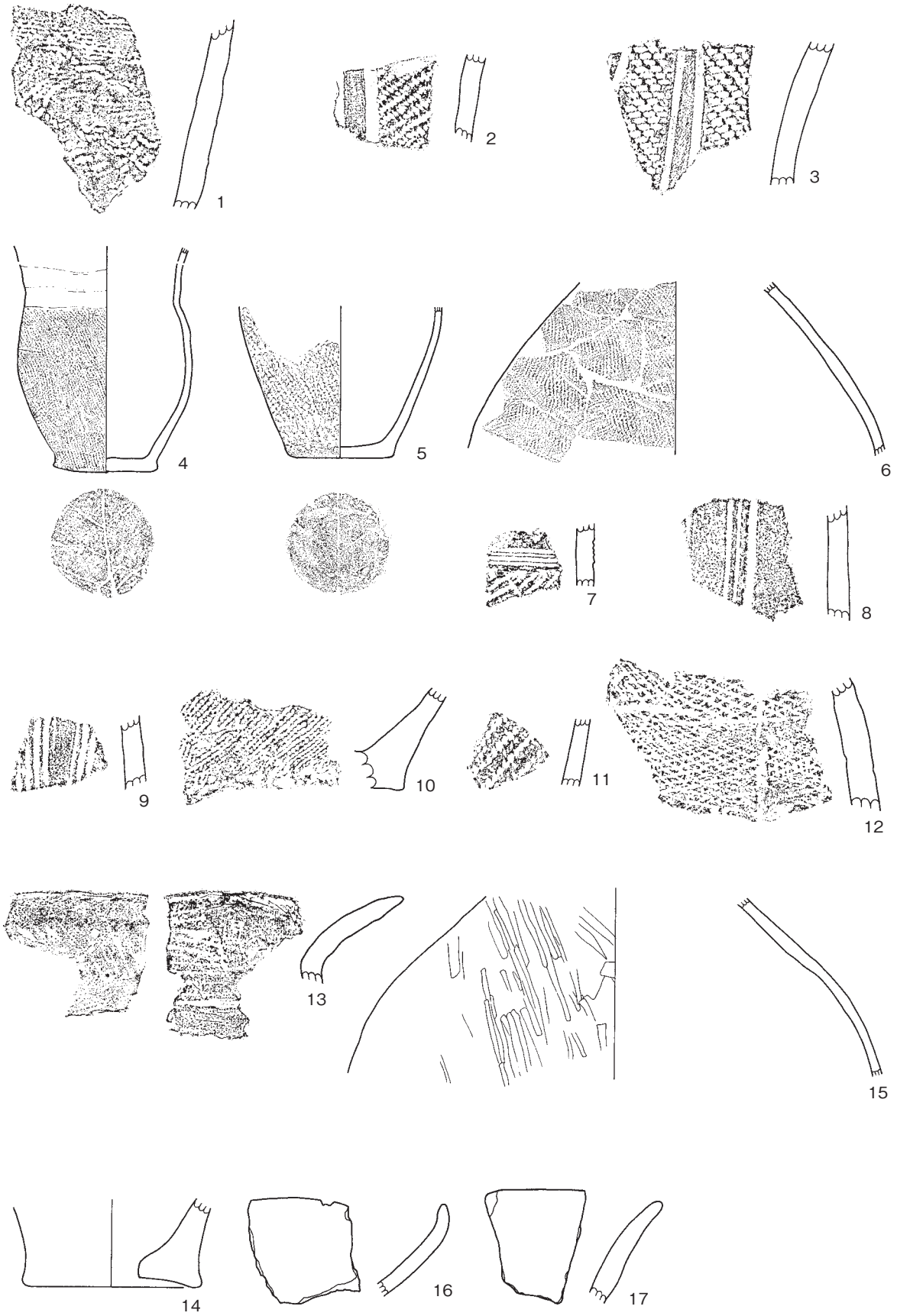


図12　作山遺跡ｄ地点出土遺物

複合口縁、頸部無文系の甕で弥生後期の所産と考えられる。底部には木葉痕。

５は、甕形土器の胴部～底部で、Ｘ－５Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の覆土からの出土である。色調は黒褐色、焼成は普通。胴部は附加条縄文で胴部下端まで施文している。底部には木葉痕。弥生後期と考えられる。

６も５同様、Ｘ－５Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の出土で覆土下層～床面直上の壺形土器の胴部上半である。色調は暗褐色、焼成は普通。胴部全体にＲＬ縄文を施す。弥生後期と考えられる。

７は、甕形土器の胴部片で、グリッド一括遺物。色調は黒褐色、焼成は良好。胴部上端を横走する４本歯の櫛描で区画、以下、附加条縄文（１種附加２条）を施文。内面は丁寧な磨き。弥生後期初頭の櫛描文系土器と考えられる。

８は、甕形土器の頸部片で､Ｂ２－５Ｇ、一括遺物。色調は外面が黒褐色、内面は灰褐色。焼成は普通。胎土に長石、石英を少量含む。３本歯の櫛描が縦走する。或いはスリットを構成する。弥生後期初頭の櫛描文系土器と考えられる。

９も８同様、甕形土器の頸部片で、Ｂ２－５Ｇ、一括遺物。色調は外面が淡褐色で黒斑あり、内面は淡褐色。焼成は普通。４本歯の櫛描が縦走する。或いはスリットを構成する。弥生後期初頭の櫛描文系土器と考えられる。

10は、甕形土器の底部片でCE－１Ｇ、一括遺物。色調は外面が橙褐色、内面が暗褐色。焼成は良好。LR縄文を胴部下端まで施文。底部には木葉痕。弥生後期と考えられる。

11は、甕形土器の胴部片で表彩資料である。色調は外面が暗褐色、内面が橙褐色。焼成は良好。附加条縄文を施文。弥生後期と考えられる。

12は、壺形土器の胴部片でＡ１-96-４Ｇ、一括遺物。色調は淡褐色。焼成は普通。網目状撚糸文を施文し、両端は結節による区画をする。弥生終末～古墳初頭の南関東系の土器と考えられる。

13～15は、古墳前期の土器である。13は、甕形土器の口縁部片。外反気味に立ち上がる素口縁である。Ａ１-96-４Ｇ、一括遺物。色調は暗褐色。焼成は普通。口唇は内外面とも横方向のナデ、頸部は外面が斜位の粗いハケ、内面が横位の粗いハケ調整を行なう。古墳前期と考えられる。

14は、壺形土器の底部片。底部はやや上げ底気味である。Ａ１-87-４Ｇ、一括遺物。色調は赤褐色。焼成は良好。内外面とも非常に良くミガキ込まれており全面に赤彩を施す。底部ほぼ中央に焼成前の穿孔あり。古墳前期と考えられる。

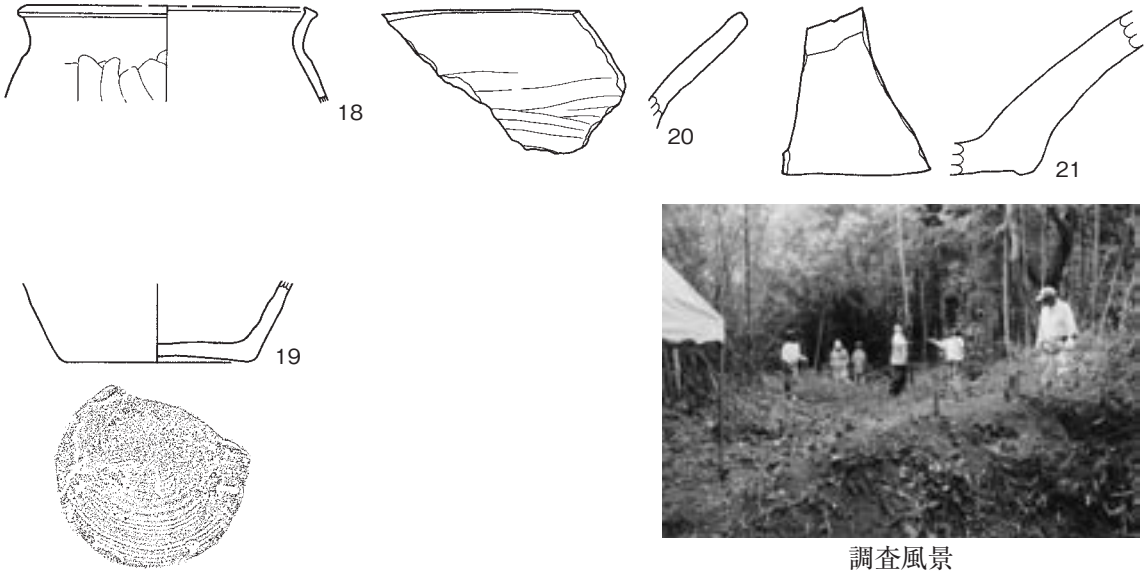
15は、壺形土器の胴部片。BE-３Ｇ、一括遺物。色調は暗褐色。焼成は普通。外面は丁寧なヘラ磨きを行い、内面はナデ調整。胴部上半から肩部にかけて赤彩が痕跡的に残る。古墳前期と考えられる。

16～17は、古墳後期の土器である。16は、坏形土器の口縁部片。丸底の坏で稜を作ることなく口縁まで緩やかに立ち上がる。Ａ１-96-４Ｇ、一括遺物。色調は暗褐色。焼成は良好。胎土に赤色スコリア少量を含む。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施す。古墳後期と考えられる。

17は、甕形土器の口縁部片。17同様、Ａ１-96-４Ｇ、一括遺物。色調は外面が橙褐色、内面が暗褐色。焼成は良好。胎土は緻密。内外面とも横方向のナデを施す。古墳後期と考えられる。

[図13（18～22）]　18～20は、奈良･平安時代の遺物である。18は､ロクロ整形の甕形土器の口縁部片で、N-２Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の出土で覆土下層の出土である。口唇部は平らに面取りされ更に内側につまみ出されている。色調は外面が暗褐色、内面が黒褐色。焼成は良好。口縁は横方向のナデ、頸部は縦方向のヘラ削りを施す。10世紀代の土師器と考えられる。

19は、18同様、N-２Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の出土で覆土下層からのロクロ整形の甕形土器の底部片で、18と同一個体と考えられる。色調は暗褐色。底部に回転糸切り痕を残す。10世紀代の



調査風景

図13　作山遺跡ｄ地点出土遺物２

土師器と考えられる。

20は、ロクロ整形の甕形土器の口縁部片で、Ａ１-79-４Ｇ、一括遺物。色調は橙褐色、焼成は良好。口縁外面は横方向のヘラ削りの後ナデを施す。内面は丁寧なヘラ磨きを施す。武蔵型の甕で、奈良・平安時代と考えられる。

その他、奈良・平安時代の遺物としてフイゴの羽口が、20と同様、Ａ１-79-４Ｇ、一括遺物として出土した。細片の為、写真のみ掲載。

21は、中世～戦国時代の遺物である。常滑焼きの甕底部片である。、Ｂ１-93Ｇ、一括遺物。色調は橙褐色、焼成は良好。15世紀代の所産と考えられる。

また、中世～戦国時代の遺物と考えられるものに、Ｄ－１Ｇ検出の溝覆土中層から緑泥片岩が出土している。板碑片の可能性も考えられる。写真のみ掲載する。

調査のまとめ

今回の調査は、隣接するａ地点において戦国期の火葬墓が調査されていたこと、今回の調査範囲内で溝や土塁が縦横に回っていたことなどから、中世～戦国期の城館址などの検出が期待された。しかし、調査の結果、それらの溝、土塁は新しいものと判断され、中世～戦国期の城館址の可能性は大きく後退してしまった。ただし、板碑片を連想させる緑泥片岩や常滑焼の甕の口縁片などの出土、また、２基ではあるが、火葬施設を連想される焼土を含む土坑を検出したことなどから、城館址とまでは言えないものの、中世～戦国の痕跡を窺い知ることができた。今回のｄ地点の周辺に中世～戦国期の拠点的な施設が存在する可能性は未だ、消えてはいないだろう。中世～戦国期の調査例がまだまだ少ない八千代市にあって該期の追加資料となれば幸いである。

また、今回の成果の１つとしては、弥生時代後期の住居跡を14軒検出できたことで、台地の北側先端部に沿った状態で集落が展開していたことが明らかになった。台地の北側は神崎川を見下ろすような位置関係にあり、弥生時代の集落としては典型的な立地とも言える。近年、印旛沼周辺の弥生土器の出土例が蓄積されつつあり、当該地域の様相が明らかにされつつあるが、印旛沼西端に位置する神崎川流域の調査例・出土例は、依然、少なかった。こうした中、印旛沼の西端地域の神崎川流域である作山ｄ地点での集落検出は、弥生後期の集落間の関係を考える上でも好例となるだろう。残念ながら、出土した遺物に口縁片がほとんど無く、詳細な時期、系統を明らかにし得なかった。今後も資料の蓄積をはかり、検討していきたい。

６．麦丸宮前上遺跡

図14　麦丸宮前上遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

麦丸宮前上遺跡は、市域中央の麦丸地区に所在する。市域中央を流れる新川西岸の台地で、かつ、新川と桑納川が合流する地点に位置する。東の新川から発達した小支谷に囲まれた舌状台地先端部～平坦部に展開する。標高約22m～23mで、低地との比高は約17mである。

周辺の遺跡としては、本遺跡西方に縄文時代の麦丸遺跡が、東方には縄文時代～奈良・平安時代に至る複合遺跡の菅地ノ台遺跡が所在する。また、南方には、縄文時代～奈良・平安時代に至る複合遺跡である権現後遺跡が所在する。権現後遺跡の更に南方は、ヲサル山遺跡、北海道遺跡などの萱田遺跡群が展開し、権現後遺跡もその一翼を担っている。

麦丸宮前上遺跡は、今回が、初めての調査となる。

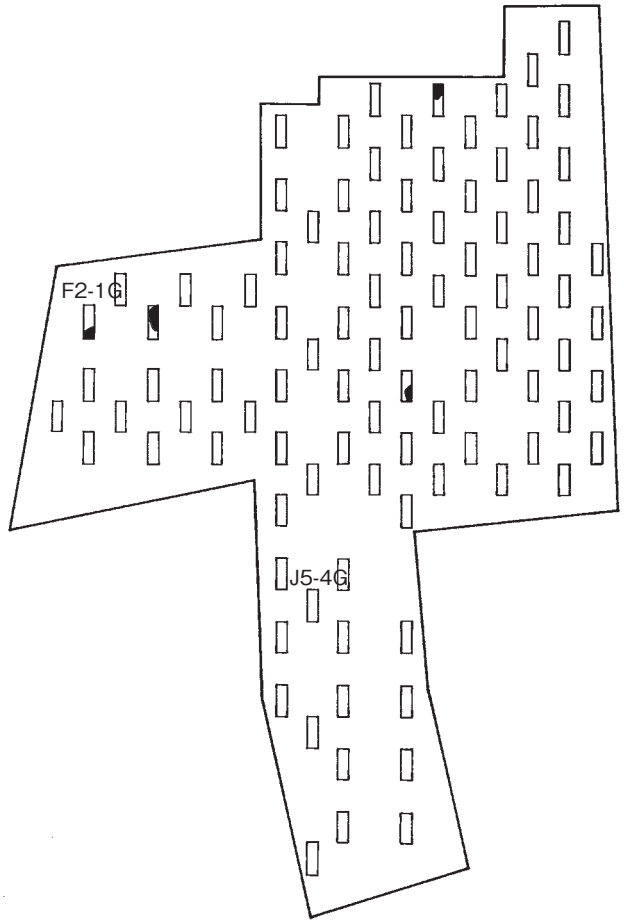
調査の方法と経過

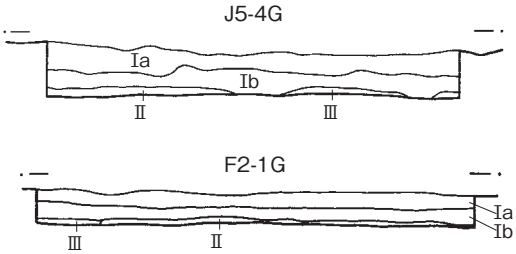
現況は、荒蕪地であった。調査区の形状に合わせ、10mのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で２m×５mのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

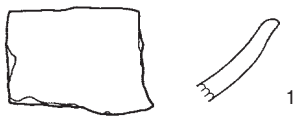
調査期間は、平成20年９月４日～９月19日で、９月４日に機材搬入などの調査準備及びグリッド杭打ちを行なう。５日からトレンチ設定及び人力による包含層調査を開始する。９日、重機による表土除去作業及び遺構確認作業を開始する。以後、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。17日、表土除去作業、遺構確認作業を終了。完掘全景写真を撮影し、埋め戻しを開始し、19日、機材撤収などの残務を行い、埋め戻しを含め調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層表土、Ⅱ層明褐色土、Ⅲ層ソフトロームで、遺構確認はⅢ層上面で行なった。







出土遺物１

図15　麦丸宮前上遺跡遺構配置図等

遺構は、古墳時代後期～奈良時代にかけての竪穴住居跡、４軒を検出した。

遺物の包含層は検出されなっかた。出土遺物は、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器が各少量出土した。１は、土師器、坏形土器の口縁部片。Ｂ７-４Ｇ、一括遺物。色調は暗褐色。焼成は良好。胎土は緻密である。外面は横位のヘラケズリ、内面は丁寧なヘラ磨きを施す。古墳時代後期～奈良時代と考えられる。

調査のまとめ

これまで麦丸地区では、少量の縄文土器、土坑等の検出はしていたが、遺跡の展開としては、やや低調であった。こうした状況の中、本遺跡は、今回が初めての調査例で、竪穴住居４軒を検出することができた。隣接する菅地ノ台遺跡、権現後遺跡遺跡などの萱田遺跡群の成果などとつき合わせつつ、古墳時代後期～奈良時代の集落展開を考える上での一例を提示することができた。今後、周辺地区での類例を蓄積しつつ検討していきたい。

７．作山遺跡ｆ地点

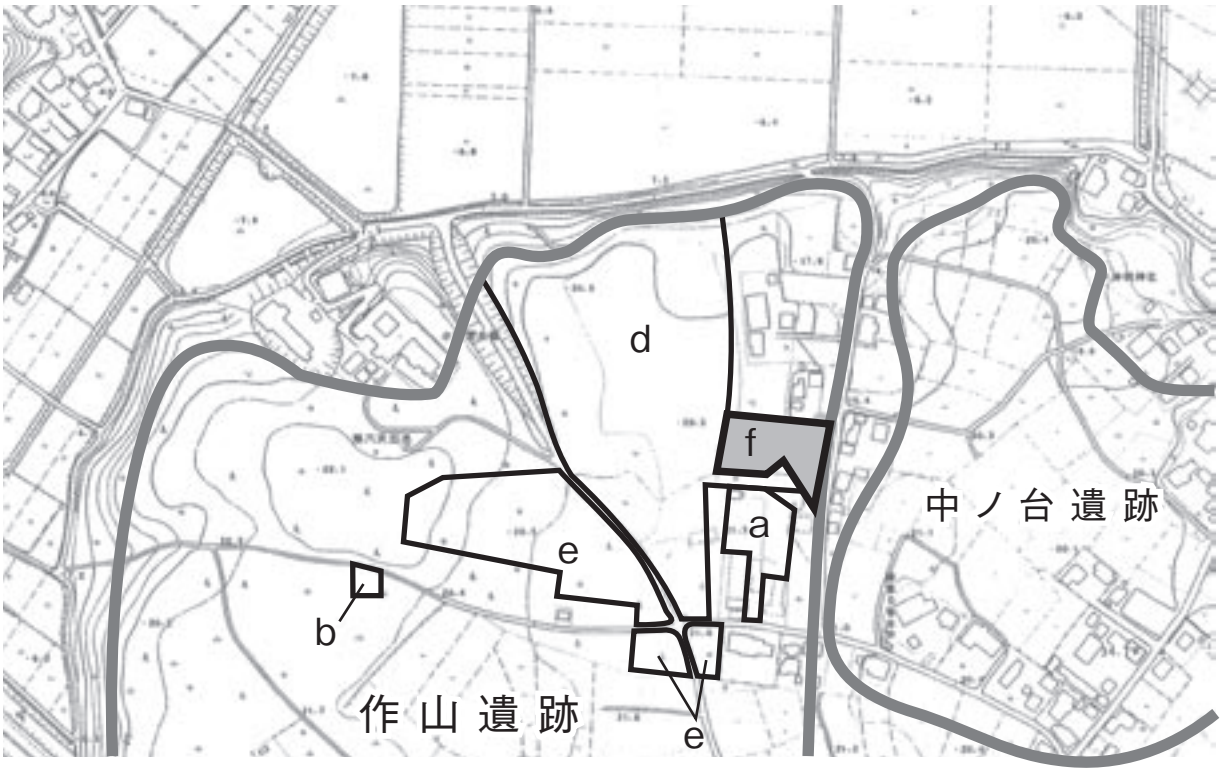


図16　作山遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

作山遺跡は、市域北部の小池地区に所在する。遺跡の立地と概要については、５．作山遺跡ｄ地点で触れているので、重複を避けるため、ここでの詳細は割愛する。

これまでにａ～ｃの３地点で発掘調査が行われていることは､作山遺跡ｄ地点の項でも触れているが、ｆ地点の確認調査の直前に本報告書とは、別事業でｅ地点の確認調査も行なっており、ｅ地点では、近世の塚３基を検出している。今回のｆ地点は、ｄ地点の東側、ａ地点の北側に隣接する地点である。

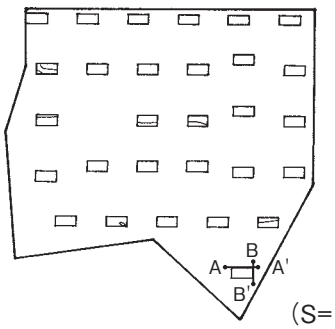
調査の方法と経過

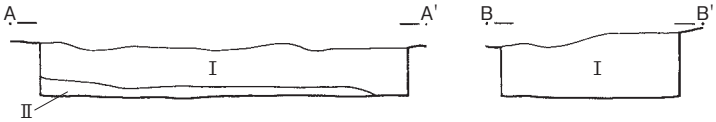
現況は、山林であった。山林は、事業者の協力を得ながら、樹木の枝払いを行いつつ並行してトレンチを設定することにした。調査区の形状や、樹木の並びを考慮しながら、概ね10m間隔のラインを設定し任意のトレンチを設定した。個々のトレンチは２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、ラインごとに概ね10ｍ間隔で設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

調査期間は、平成20年12月16日～平成21年１月７日で、12月16日に機材搬入、調査区閉鎖、現況写真撮影などの調査準備及びトレンチ設定を行なう。同日、人力による包含層調査を開始、重機による表土除去作業も並行して開始する。18日から遺構確認作業を開始する。調査の進捗に合わせ、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。25日に遺構確認作業を終了し、完掘状況写真を撮影し､26日、一部、機材撤収を行い、年内の調査を終了した。明けて､１月７日、機材撤収を含め、調査を終了した。

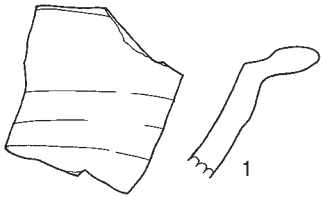
調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、ソフトロームで、遺構確認は、Ⅱ層上面で行なった。





(S=1/1,000)



出土遺物１

調査風景

調査前現況

トレンチ完掘状況

調査終了状況

図17　作山遺跡Ｆ地点　トレンチ配置図等

遺構は、検出されなかった。

遺物の包含層も検出されなっかた。出土遺物は、古墳時代の土師器の細片が少量と中世の陶磁器が１点、出土した。１は、中世陶磁器で、古瀬戸の盤類、折縁深皿の口縁部片。A-２G、一括遺物。色調は緑白色。焼成は良好。胎土は緻密である。14世紀後半と考えられる。

調査のまとめ

ｆ地点の調査では、遺構を検出することができなかったが、14世紀後半と考えられる中世陶磁器片が１片ながら出土した。ｄ地点においても15世紀代の陶磁器（常滑焼）が出土している。隣接するａ地点においては、中世～戦国期の火葬墓、土坑墓が調査されていたこと等を踏まえると、作山遺跡のａ地点、及びｆ地点の東側にに中世～戦国期の遺跡が展開している可能性が大きい。今後とも調査例を積み重ね、検討していきたい。

８．阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点

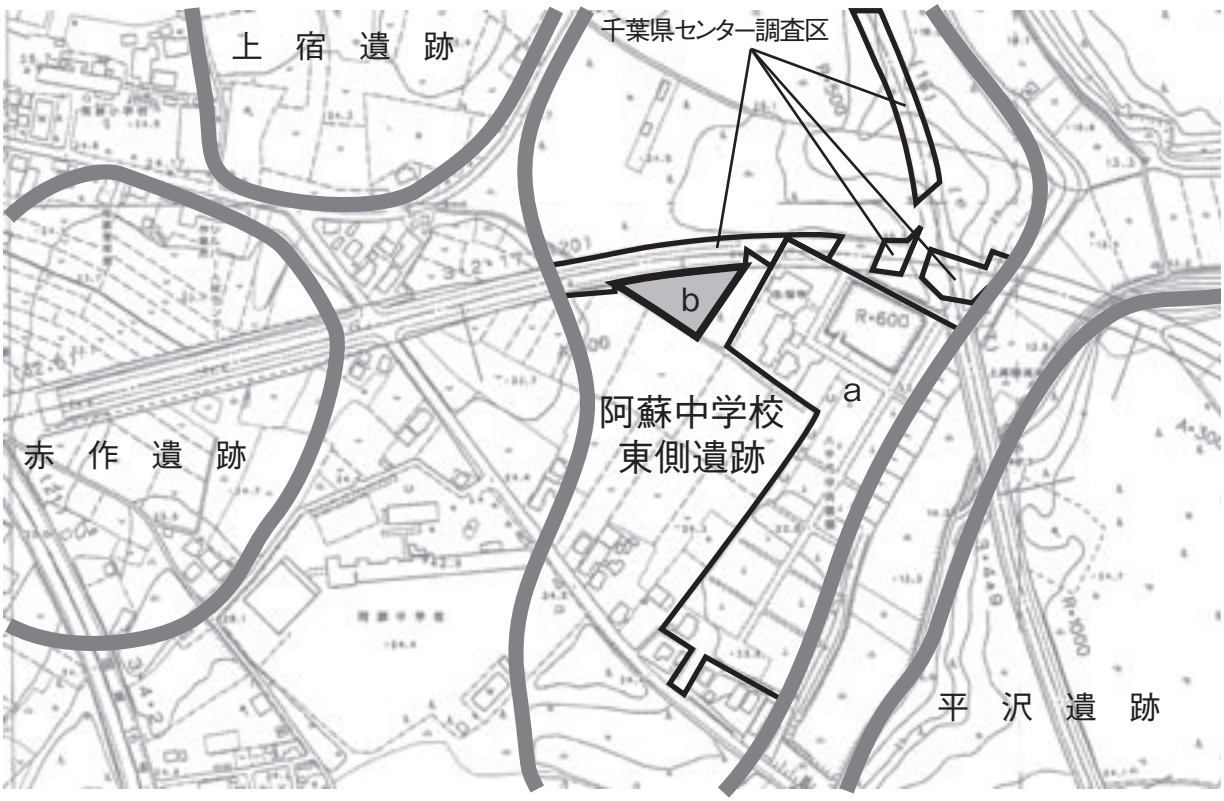


図18　阿蘇中学校東側遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

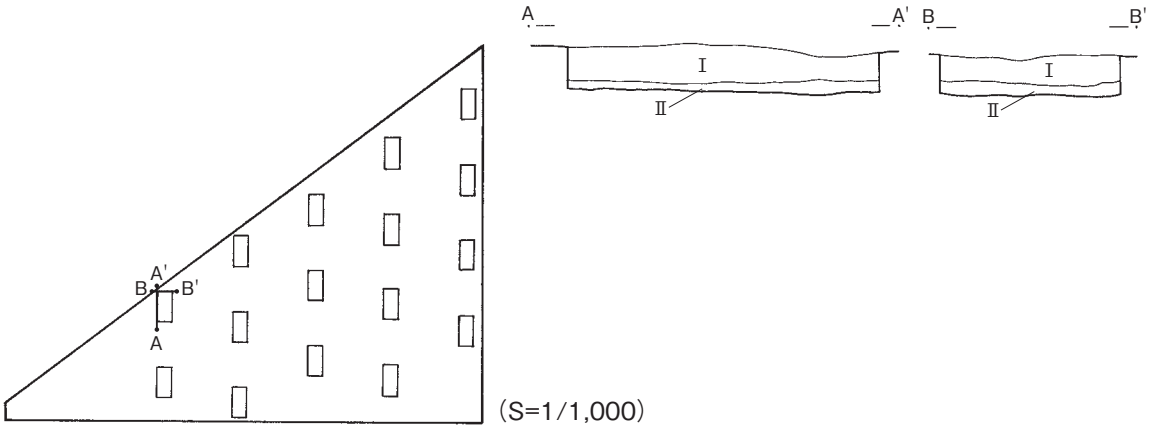
阿蘇中学校東側遺跡は、市域中央やや北に位置する阿蘇地区に所在する。佐倉市との市境を流れる小竹川から樹枝状に発達した小支谷によって北・東・南を区切られている台地一帯に展開する。標高は約24mで、低地との比高は約11mである。

周辺の遺跡として、本遺跡の西方に中近世の土坑墓群などが検出された赤作遺跡、北側に上宿遺跡などが展開する。また、南側の小支谷を隔てた対岸には、平沢遺跡が展開し、弥生時代の竪穴住居跡10軒等を検出している。

これまでに八千代市で１地点（ａ地点）、千葉県によって２地点（千葉県平成10年度調査地点・平成16年度調査地点）の計３地点で調査が行われている。ａ地点は、昭和54年～58年にかけて断続的に墓地造成に伴う調査として実施された。台地縁辺部に位置し、縄文時代の埋甕１基、弥生時代の竪穴住居跡19軒、方形周溝墓２基等が検出されている。千葉県平成10年度調査地点は、ａ地点の北側を東西に走る国道296号線バイパス建設工事に伴う調査で、中近世の土坑群が検出された。平成16年度調査地点は、県道竜ヶ崎線改修工事に伴う調査で縄文時代の土坑５基、弥生時代の竪穴住居跡１軒等が検出されている。今回のｂ地点は、八千代市調査のａ地点の西側隣接地及び千葉県調査の平成10年度調査地点の南側隣接地に位置し、台地の縁辺からやや奥まった平坦面に位置する地点である。

調査の方法と経過

現況は、山林であった。トレンチは、事業者の協力を得て樹木の枝払いを実施した後、設定することにした。調査区の形状や樹木の並びを考慮しながら、概ね10m間隔のラインを設定し、個々のトレンチは２ｍ×４ｍのトレンチとし、ラインごとに概ね10m間隔で設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。



調査前現況

調査風景

トレンチ完掘状況

調査終了状況

図19　阿蘇中学校東側遺跡　トレンチ配置図等

調査期間は、平成20年12月17日～平成21年１月７日で、12月19日までに機材搬入、調査区閉鎖、現況写真撮影及びトレンチ設定などの調査準備を行なう。19日、重機による表土除去作業を開始する。24日から遺構確認作業を開始する。調査の進捗に合わせ、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。26日に遺構確認作業を終了し、完掘状況写真を撮影し、機材撤収を行い、年内の調査を終了した。明けて、１月６日から重機埋め戻しを行い、７日、機材撤収を含め、調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、ソフトロームで、遺構確認は、Ⅱ層上面で行なった。

遺構は、検出されなかった。遺物も出土しなかった。

調査のまとめ

ｂ地点の調査では、遺構･遺物を検出することができなかった。過去の調査例と合わせて検討するならば、縄文時代、弥生時代の遺跡は、台地縁辺部に展開し、中近世の土坑群は、台地中央の平坦面に展開している。今回のｂ地点は、そのどちらにも属さない中間的な地点に位置し、遺跡の空白地帯であったと言えよう。今後とも周辺の調査例を積み重ね、検討していきたい。

９．桑納前畑遺跡ｂ地点

図20　桑納前畑遺跡位置図（１：5,000）

遺跡の立地と概要

桑納前畑遺跡は、市域中央やや北に位置する桑納地区に所在する。桑納川を南に、新川を東に臨む台地上に立地する。樹枝状に発達した小支谷によって東、西、北を区切られている舌状台地に展開する。標高は約22mで、低地との比高は約13mである。

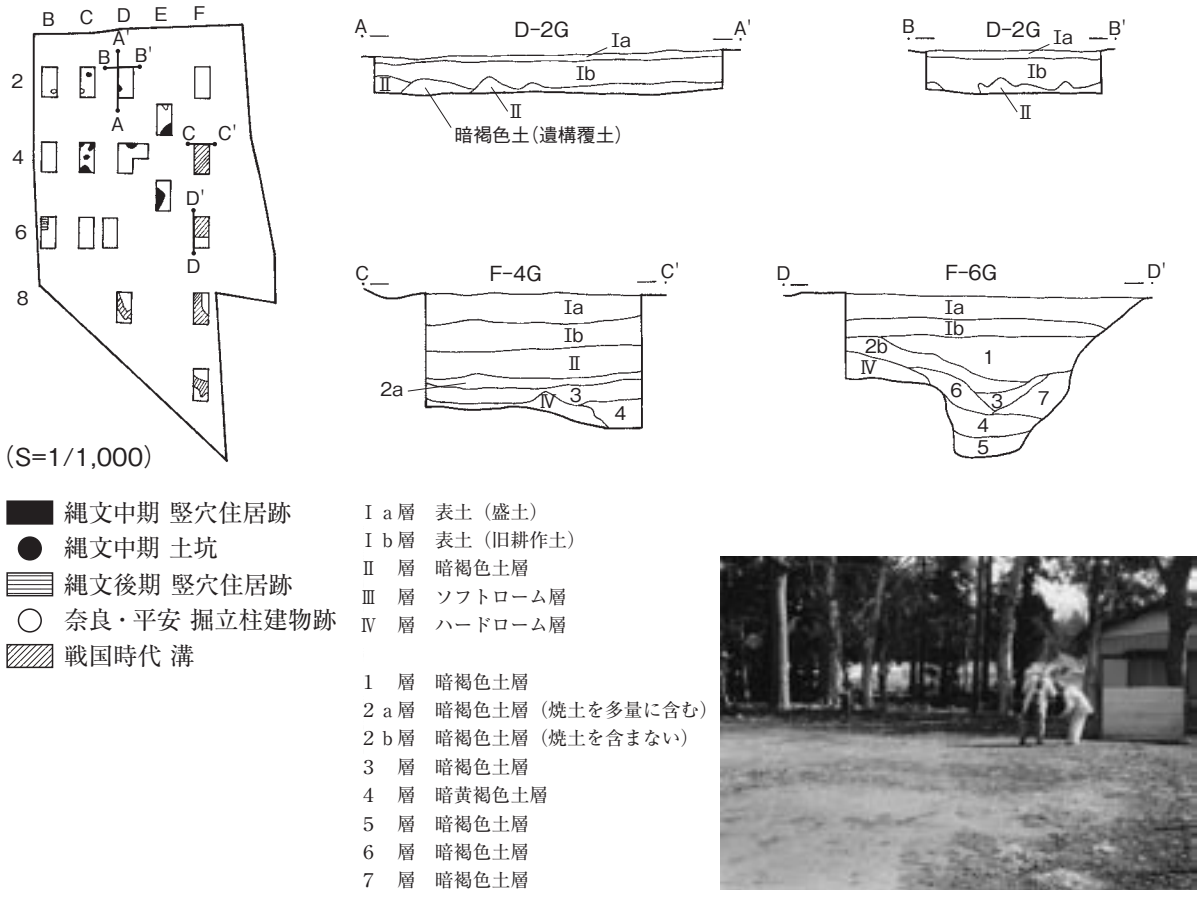
周辺の遺跡として、本遺跡の南方には桑納遺跡、桑橋新田遺跡が隣接して展開し、これまでの確認調査によって台地先端を中心に弥生時代～奈良平安時代の竪穴住居跡が濃密に展開していることが明らかになりつつある。東方の谷津を隔てて花輪台遺跡が展開している。西方の谷津を隔て、東帰久保遺跡、東帰久保南遺跡が、北方の谷津を隔てては島田遺跡が展開している。また、本遺跡の範囲内に近世の熊野神社群集塚が存在する。

これまでに２地点で発掘調査が行われている。昭和52（1977）年に市立小学校建設に伴い、睦小学校北方遺跡調査会で桑納前畑遺跡（ａ地点）の調査が実施され､53年に報告されている。縄文時代の土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出されている。また、時期不明の溝、土坑等も検出されている。昭和53（1978）年には、小学校改築に伴いａ地点隣接地を八千代市遺跡調査会が、睦小学校遺跡として調査を実施し、56年に報告されている。奈良・平安時代の掘立柱建物跡を中心に同時代の竪穴住居跡、時期不明の溝、土坑等が検出されている。

過去２地点の調査は、同一遺跡内の調査であるが、刊行された報告書名が２つの遺跡名となっている。これらの経緯を踏まえ、本地点は桑納前畑遺跡ｂ地点とする。

調査の方法と経過

現況は、畑であった。調査区の形状に合わせ、５ｍのグリッドを組み、グリッドに沿った状態で、基



調査風景

図21　桑納前畑遺跡ｂ地点遺構配置図等

本、10m間隔で２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、表土除去及び遺構・遺物の検出に努めた。表土除去については、重機を使用した。

調査期間は、平成21年１月29日～２月16日で、１月29日に機材搬入、現況写真撮影などの調査準備を行なう。２月２日に表面採集、グリッド杭打ち及びトレンチ設定を行ない、人力による包含層調査を開始する。４日、包含層調査を終了し、重機による表土除去作業及び遺構確認作業を開始する。調査の進捗に合わせ、写真撮影、土層断面図作成等の記録作業も適宜行なう。12日、遺構確認作業を終了。完掘全景写真を撮影し、一部埋め戻しを開始する。13日～16日に埋め戻し及び機材撤収などの残務を行い、調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本土層はⅠ層、表土、Ⅱ層、暗褐色土層、Ⅲ層、ソフトローム層、Ⅳ層、ハードローム層で、遺構確認は、Ⅲ層上面で行なった。調査区の東側は、中世から戦国期にかけての削平を受けたと考えられ、表土層下にローム混じりの暗褐色土層（Ⅱ層）が存在し、更にその下層の暗褐色土は、焼土を多量に含み、中世～戦国期の陶磁器類が多量に出土した。東側の地山はⅣ層､ハードローム層であった。

遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡３軒、土坑６基、縄文時代後期の竪穴住居跡１軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡２棟、戦国時代の溝３条を検出した。

遺物の包含層は検出されなっかた｡遺物は､縄文土器､中世～戦国期の陶磁器類が主体となり出土した。[図22(１～14)]　１～13は、何れも縄文土器である。１は、深鉢口縁部片でＦ－10Ｇ出土。色調は暗褐色。焼成は普通。胎土に雲母少量を含む。枠状の隆帯の内側に添って２列の角押文を施す。内面は陵を持ち

内湾し、丁寧にミガキを施す。中期、阿玉台Ⅱ式と考えられる。口唇部に焼成後の刻みと考えられる抉りが見られることから土器片錘の可能性あり。

２～５は何れもC－２Ｇ出土。２は、深鉢口縁部片で、色調は外面、暗褐色、内面、褐色。焼成は普通、胎土に石英、長石を微量含む。平縁で口縁部下端を沈線で区画し以下をＬＲ縄文を施す。中期、加曽利ＥⅢ～Ⅳ式と考えられる。３は、深鉢口縁部片で、色調は外面、黒褐色、内面、暗褐色。焼成は普通、胎土に石英、長石を微量含む。平縁で口縁部下端を微隆起で区画し、以下をＲＬ縄文を施し、さらに沈線で区画する。中期、加曽利ＥⅣ式と考えられる。４は、深鉢口縁部片で、色調は暗褐色。焼成は普通、胎土に石英、長石、赤色スコリアを微量含む。平縁で口唇部は角頭状に面取りされている。無文で内外面とも無調整である。中期、加曽利Ｅと考えられる。５は、深鉢胴部片で、色調は褐色。焼成は普通、胎土に砂粒少量、雲母微量を含む。ＲＬ縄文を施し微隆起で区画、微隆起内側は、ミガキが施されている。中期、加曽利ＥⅣ式と考えられる。

６、７は、Ｄ－４Ｇ出土。深鉢胴部片で色調は外面、褐色、内面、黒褐色。焼成は普通、胎土は緻密。ＬＲ縄文を施し微隆起による区画を行なう。微隆起内側は、丁寧な磨きが施されている。内面は、非常に丁寧にミガキ込まれている。中期、加曽利ＥⅣ式と考えられる。７は、深鉢底部片で色調は褐色。焼成は良好。底部直近までＬＲ縄文を施し３条の沈線で区画を行なう。内面は丁寧なミガキが施されている。中期、加曽利Ｅ式と考えられる。

８～12は、Ｂ－６Ｇ検出の住居跡のサブトレンチ掘削中の覆土からの出土である。８は、深鉢口縁部片で色調は淡褐色。焼成は普通。口縁は平縁で、外面は、無文帯を形成し横走する沈線による区画を行なう。以下、垂下する縄文帯があり沈線による区画を行なう。原体は磨耗しているため不明。内面は軽くミガキを施す。後期、称名寺式と考えられる。９は、深鉢頸部片で、色調は、外面、黒褐色。内面、暗褐色。焼成は良好。地文をＲＬを施文し、沈線で区画を行なう。無文部は丁寧にミガキを施す。後期、称名寺式と考えられる。10は、深鉢胴部片で、色調は、外面、暗褐色。内面、明褐色。焼成は普通。ＬＲを施文し、沈線で区画を行なう。沈線と沈線の区画内はミガキを施す。内面は、横方向の丁寧なミガキを施す。後期、称名寺式と考えられる。11は、深鉢胴部片で、色調は、橙褐色。焼成は普通。沈線による格子目文を構成する。内面は、丁寧にミガキ込まれている。後期、称名寺式と考えられる。12は、深鉢底部片で、底部はやや張り出す。色調は、暗褐色。焼成は普通。内外面とも丁寧にミガキ込まれている。後期、称名寺式と考えられる。

13は、深鉢胴部片でＥ－３Ｇ出土。色調は暗褐色。焼成は良好。隆帯とその下方に平行する沈線が５条、横走する。内面は丁寧にミガキを施す。後期、堀之内式か。

14は、弥生土器で、Ｂ－４Ｇ出土。甕形土器胴部片である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色である。焼成は普通。附加条縄文（第１種附加２条）を施す。弥生後期と考えられる。

[図23（15～18）]　15～18は、何れも中世～戦国期にかけての陶磁器類である。Ｆ－４Ｇ、Ｆ－６Ｇを中心に出土している。15は、常滑焼、高台付鉢の体部片で、Ｆ－４Ｇ出土。ロクロ成形で色調は灰色、焼成は良好、胎土に白色砂粒少量を含む。常滑６型式、13世紀代の所産か。

16は、常滑焼、甕の口縁部片で、Ｆ－６Ｇ出土。ロクロ成形で、口縁部に粘土帯を被いかぶせるように貼り付け、複合口縁としている。色調は暗褐色。焼成は良好。胎土に白色砂粒、少量を含む。常滑９型式、15世紀代の所産か。

17は、常滑焼、甕の胴部片で、Ｆ－４Ｇ出土。ロクロ成形で色調は暗赤褐色、焼成は良好、胎土に白色砂粒少量を含む。15世紀代の所産か。

18は、古瀬戸（後期）、盤類の底部片で、Ｆ－６Ｇ出土。ロクロ成形でハケ塗りである。色調は外面

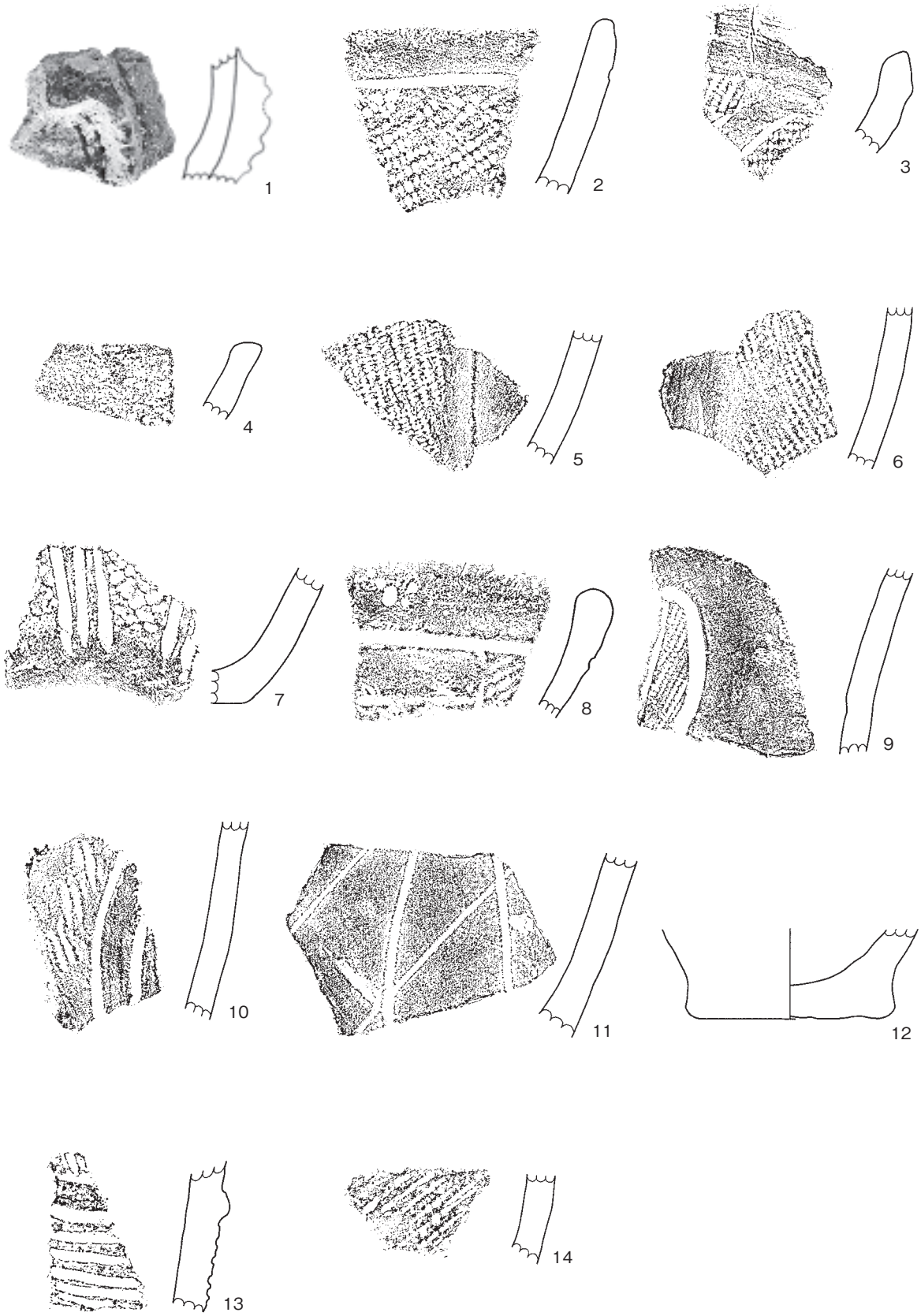


図22　桑納前畑遺跡出土遺物

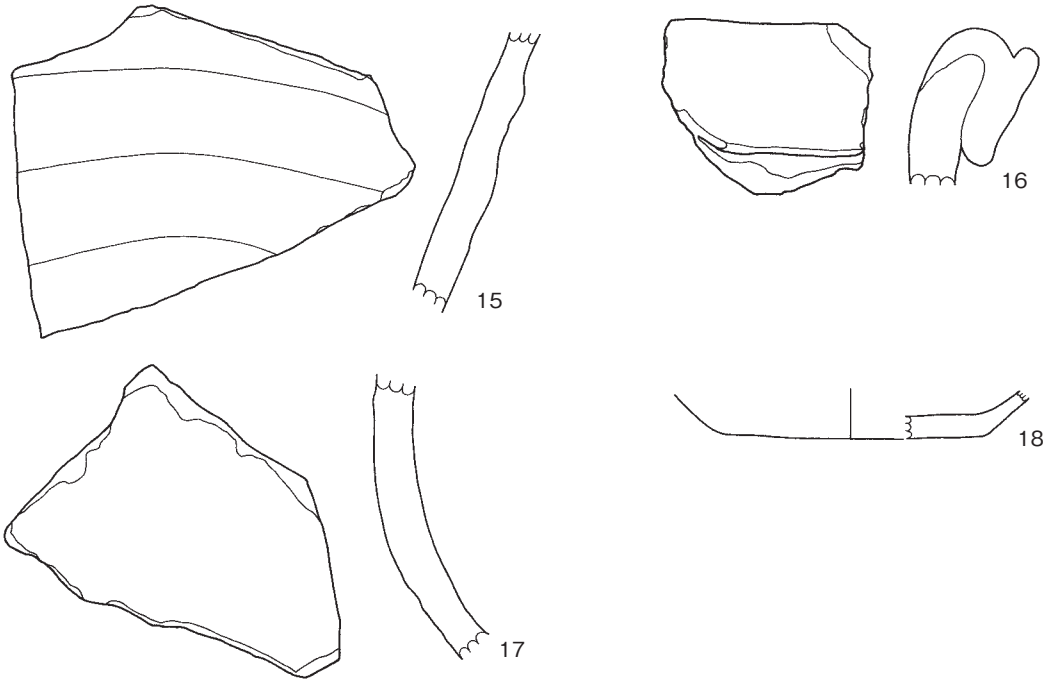


図23　桑納前畑遺跡ｂ地点出土遺物２

が赤みがかった白色、内面が緑がかった白色。焼成は良好。胎土は緻密。15世紀代の所産か。

その他、時期不明の陶磁器がＣ－２Ｇから出土。写真のみの掲載とした。

調査のまとめ

ｂ地点の調査では、縄文時代中期と後期の竪穴住居跡及び土坑が検出され、縄文時代の主体となる時期を中期末～後期初頭であることを明らかにすることができた。

奈良・平安時代の集落については、これまでの調査地点でも、竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されていたが、今回も掘立柱建物跡と考えられる土坑が検出されており、当該期の集落が大きく展開している様相を捉えることができた。

更には、中世～戦国期の溝、遺物の検出されたことによって桑納前畑遺跡に中世～戦国期の遺構の存在を明らかにし得た。また、周辺の地形を見た時、台地の崖線が直角に折れ曲がっていることなども中世～戦国期に人為的な工事が加わっている事を連想させる。また、52年調査の桑納前畑遺跡（ａ地点）の報告書で用途不明のＴ字形の土坑が検出されていたが、それらは、その後の調査例の増加により戦国期の火葬墓、或いは、火葬の施設と考えられる。

桑納前畑遺跡は、縄文時代中後期、奈良・平安時代そして中世～戦国期の３時期を中心とした複合遺跡で、遺構の密度もそれぞれにかなり高い遺跡と言えるだろう。

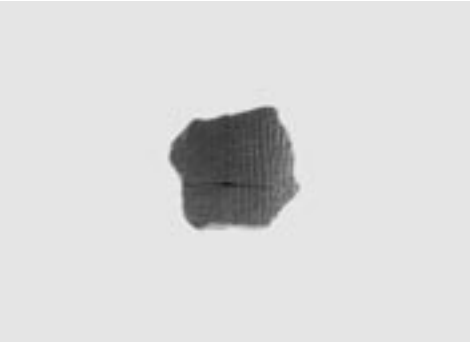
図版１

村上第１塚群　遺構検出状況

村上第１塚群　遺構検出状況

村上第１塚群　遺構検出状況

村上第１塚群　遺構検出状況



村上第１塚群　出土遺物１

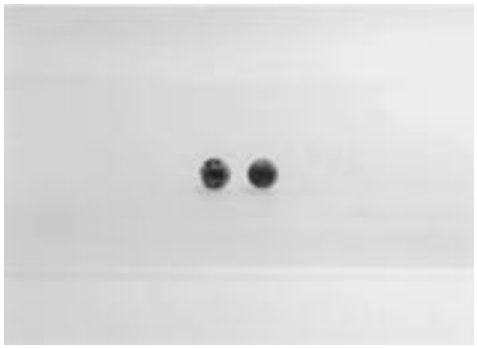
村上第１塚群　出土遺物２

図版２

新東原遺跡ｉ地点　遺構検出状況

新東原遺跡ｉ地点　調査風景

新東原遺跡ｉ地点　出土遺物



新東原遺跡ｉ地点　出土遺物

川崎山遺跡ｏ地点　セクション

川崎山遺跡ｏ地点　トレンチ完掘状況

川崎山遺跡ｏ地点　完掘全景

図版３

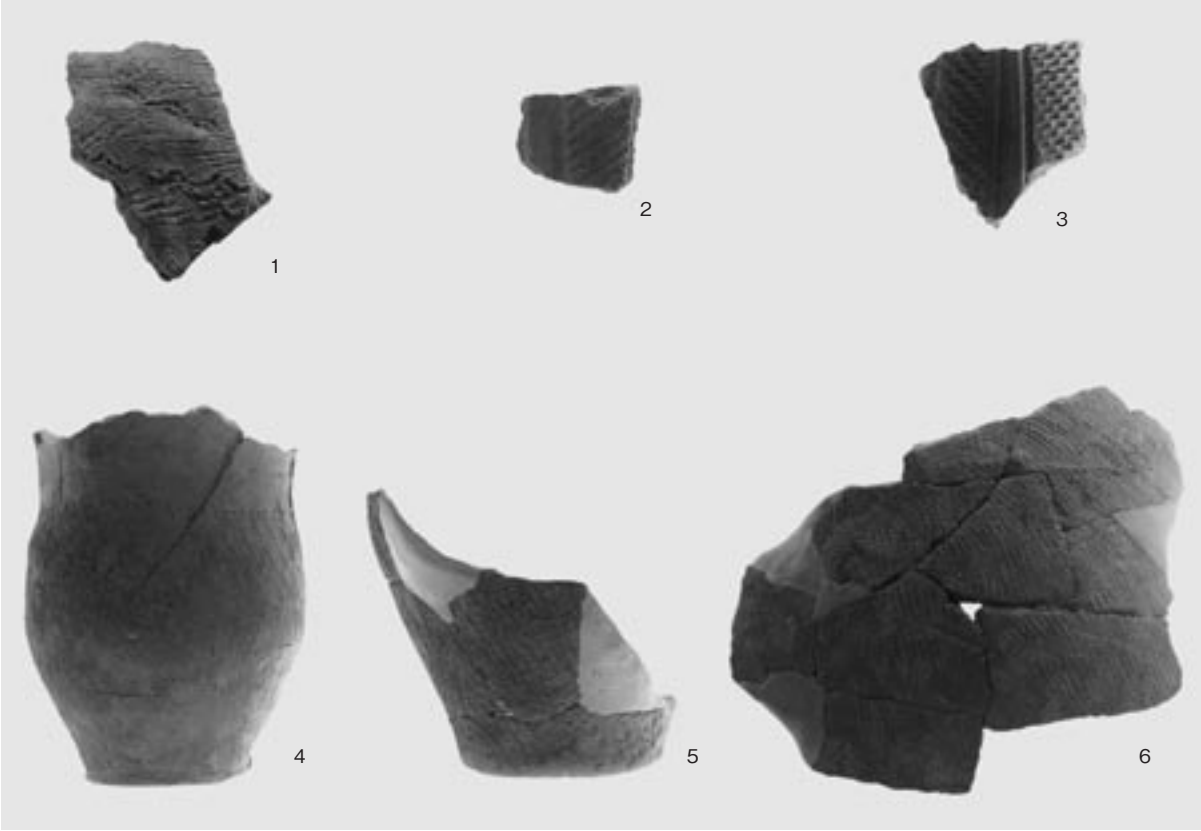
作山遺跡ｄ地点　遺構検出状況

作山遺跡ｄ地点　遺構検出状況

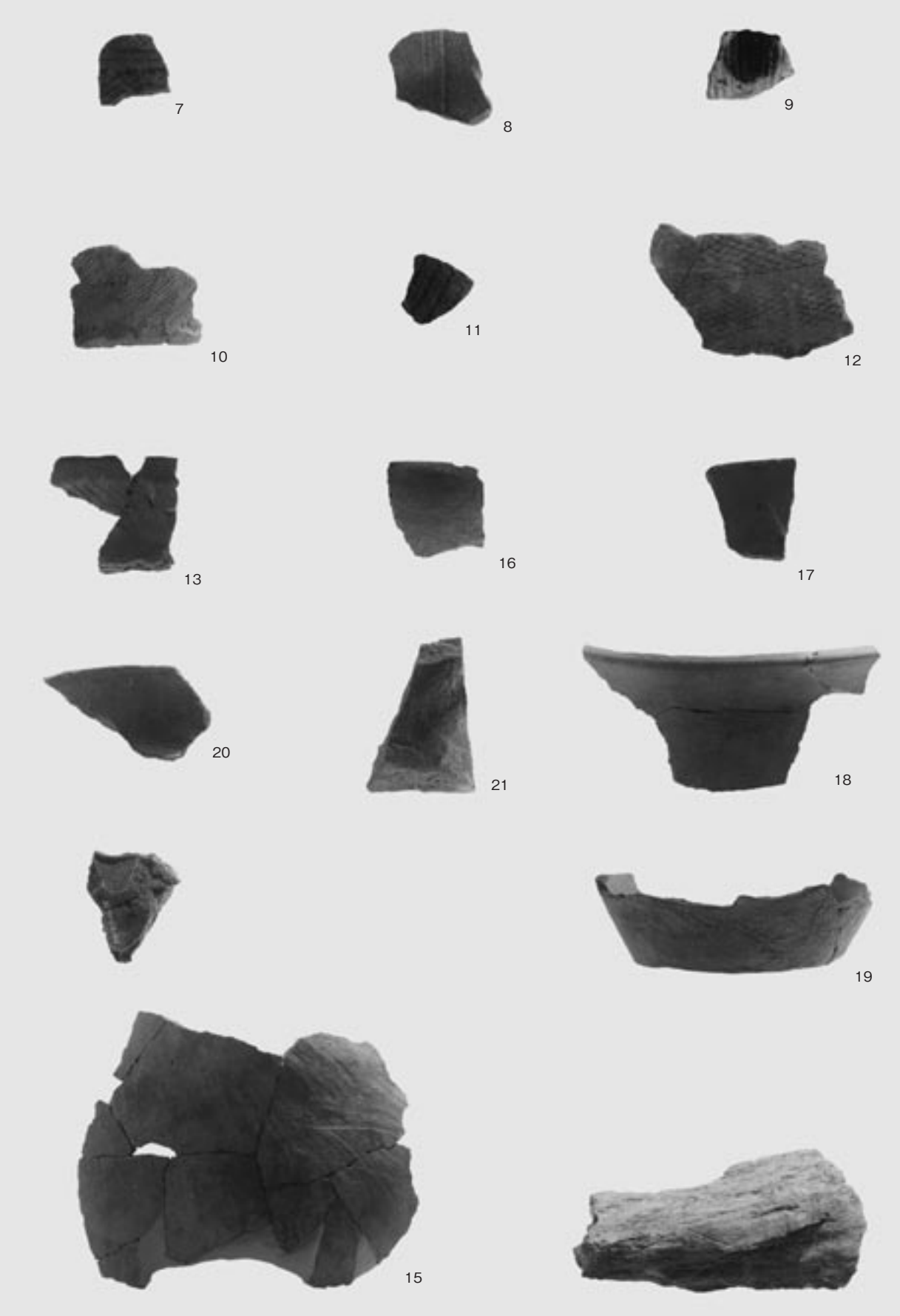
作山遺跡ｄ地点　遺構検出状況

作山遺跡ｄ地点　遺構検出状況

作山遺跡ｄ地点　出土遺物



図版４　作山遺跡ｄ地点出土遺物



麦丸宮前上遺跡　遺構検出状況

麦丸宮前上遺跡　遺構検出状況

麦丸宮前上遺跡　遺構検出状況

麦丸宮前上遺跡　遺構検出状況

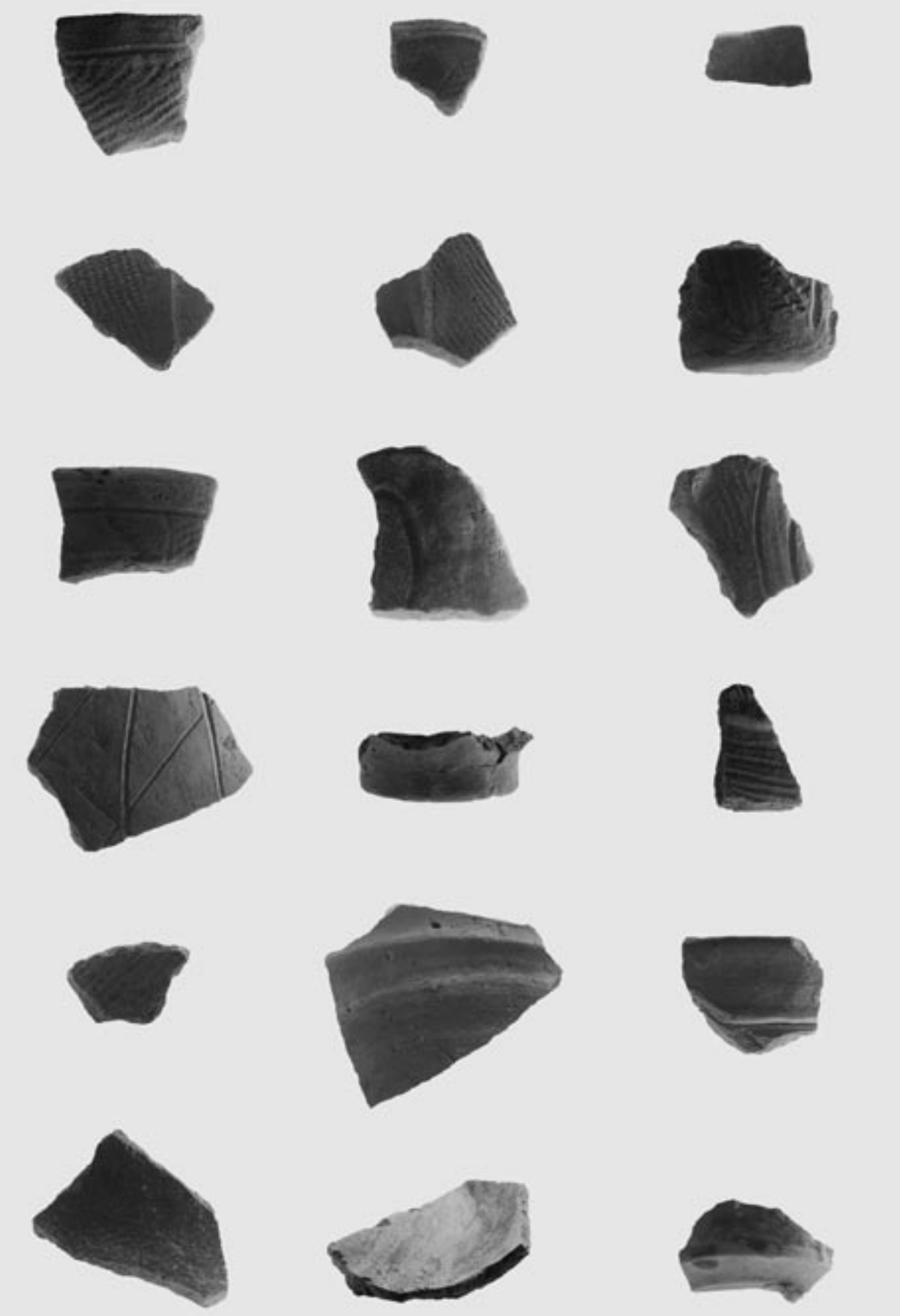
桑納前畑遺跡ｂ地点　遺構検出状況

桑納前畑遺跡ｂ地点　遺構検出状況

桑納前畑遺跡ｂ地点　遺構検出状況

桑納前畑遺跡ｂ地点　遺構検出状況

図版６　桑納前畑遺跡ｂ地点出土遺物



報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ　へいせい21ねんど
書名	千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成21年度
副書名	東山久保遺跡ｃ地点　村上第１塚群　新東原遺跡ｉ地点　川崎山遺跡ｏ地点　作山遺跡ｄ地点 麦丸宮前上遺跡　作山遺跡ｆ地点　阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点　桑納前畑遺跡ｂ地点
編集者名	宮澤　久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-２　　TEL. 047（483）1151
発行年月日	西暦　2010年　（平成22年）　３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうざんくぼ 東山久保遺跡ｃ地点	やちよしししまだいあざとうざんくぼ 八千代市島田台字東山久保989-１の一部	12221	24	35度 46分 14秒	140度 ６分 ３秒	20080501 ～ 20080522	134㎡ ／1,431.15㎡	宅地造成
むらかみだいいちつかぐん 村上第１塚群	やちよしむらかみあざしろすじ 八千代市村上字白筋2256-1,2257-１	12221	211	35度 43分 21秒	140度 ７分 19秒	20080520 ～ 20080530	222㎡ ／2,338㎡	宅地造成
しんとうはら 新東原遺跡ｉ地点	やちよしかつたあざしんとうはら 八千代市勝田字新東原1278ほか	12221	259	35度 42分 ３秒	140度 ８分 13秒	20080604 ～ 20080703	1,312㎡ ／15,893㎡	宅地造成
かわさきやま 川崎山遺跡ｏ地点	やちよしかやだあざなかだい 八千代市萱田字中台2264番１ほか	12221	241	35度 43分 19秒	140度 ６分 22秒	20080716 ～ 20080731	264㎡ ／3,569㎡	土砂採取
さくやま 作山遺跡ｄ地点	やちよしこいけあざさくやま 八千代市小池字作山415	12221	1	35度 46分 51秒	140度 ５分 23秒	20080801 ～ 20081201	2,256㎡ ／25,800㎡	森林伐採抜根造成
むぎまるみやまえかみ 麦丸宮前上遺跡	やちよしむぎまるあざみやまえかみ 八千代市麦丸字宮前上1393-４ほか	12221	153	35度 44分 33秒	140度 ６分 15秒	20080904 ～ 20080919	686㎡ ／7,123.96㎡	宅地造成
さくやま 作山遺跡ｆ地点	やちよしこいけあざさくやま 八千代市小池字作山408	12221	1	35度 46分 36秒	140度 ５分 27秒	20081216 ～ 20090107	232㎡ ／2,280㎡	駐車場建設
あそちゅうがっこうひがしがわ 阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点	やちよしよなもとあざさんや 八千代市米本字山谷2750-２ほか	12221	119	35度 44分 44秒	140度 ７分 32秒	20081217 ～ 20090107	128㎡ ／1,669㎡	店舗建設
かんのうまえはた 桑納前畑遺跡ｂ地点	やちよしかんのうあざまるはた 八千代市桑納字丸畑97番地３ほか	12221	53	35度 45分 31秒	140度 ５分 50秒	20090130 ～ 20090216	140㎡ ／1,116.84㎡	福祉施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東山久保遺跡ｃ地点	包蔵地	縄文時代～中近世	—	—	
村上第１塚群	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　１軒	縄文土器	
	包蔵地	古墳時代	土坑　３基	古墳時代土師器	
新東原遺跡ｉ地点	包蔵地	縄文時代	陥穴　１基、土坑　１基	縄文土器	
川崎山遺跡ｏ地点	集落跡	縄文時代～中近世	—	縄文土器	
作山遺跡ｄ地点	包蔵地	縄文時代	—	縄文土器	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡（後期）　14軒	弥生土器	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡（前期）　１軒	古墳時代土師器	
			竪穴住居跡（後期）　１軒		
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡　１軒	奈良・平安時代土師器	
	包蔵地	中世～戦国	土坑　３基	中近世陶磁器	
麦丸宮前上遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡　４軒	奈良・平安時代　土師器、須恵器	
作山遺跡ｆ地点	包蔵地	縄文時代～中近世	—	古墳時代土師器　中近世陶磁器	
阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点	集落跡	縄文時代・弥生時代	—	—	
桑納前畑遺跡ｂ地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　４軒、土坑　７基	縄文土器	
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡　２棟	—	
	包蔵地	戦国時代	溝　３条	中近世陶磁器	

要　約

国庫、県費補助金を受け、実施した確認調査、８遺跡、９地点の発掘調査報告書である。

東山久保遺跡ｃ地点　検出遺構なし。

村上第１塚群　縄文時代の竪穴住居跡１軒、土坑１基、古墳時の土坑３基を検出した。市内最古級の竪穴住居を検出することができた。

新東原遺跡ｉ地点　縄文時代の陥穴１基、土坑１基を検出した。

川崎山遺跡ｏ地点　検出遺構なし。縄文集落の範囲を特定できた。

作山遺跡ｄ地点　弥生時代の竪穴住居跡 14 軒、古墳時代竪穴住居跡２軒（前期１、後期１）奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒、中世～戦国期の土坑３基を検出し、縄文時代～中近世に至る複合遺跡であることが明らかになった。

麦丸宮前上遺跡　奈良・平安時代の竪穴住居跡４軒を検出した。

作山遺跡ｆ地点　検出遺構なし。弥生～古墳時代の集落の範囲を特定できた。中世～戦国期の陶磁器出土。

阿蘇中学校東側遺跡ｂ地点　検出遺構なし。

桑納前畑遺跡ｂ地点　縄文時代の竪穴住居跡３軒、土坑６基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡２棟、戦国時代の溝３条を検出した。

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成21年度

発　行　日　　平成22年３月29日
編集・発行　　八千代市教育委員会 社会教育課
　　〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-２
　　TEL 047(483)1151
印　　刷　　金子印刷企画